麦野Ａ遺跡９

― 麦野Ａ遺跡第23次･24次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1323集

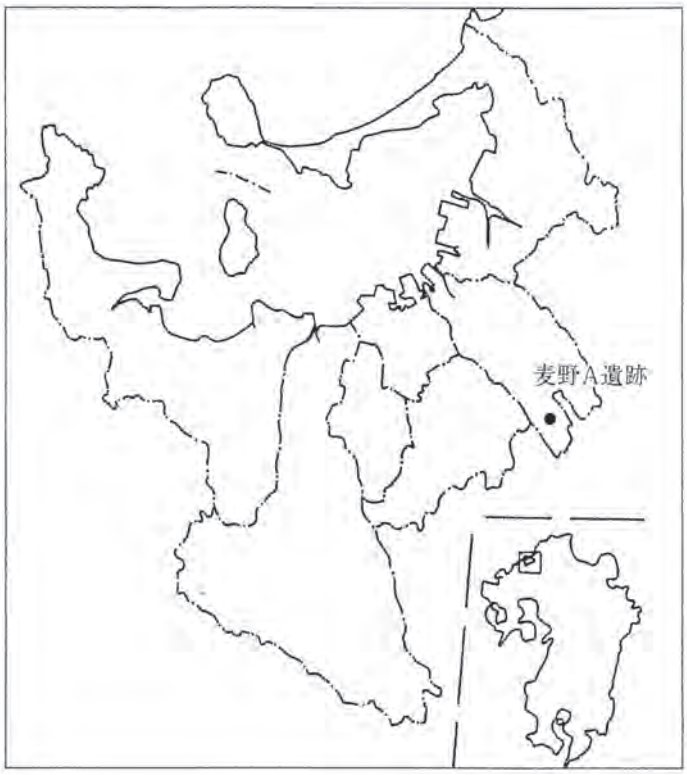
２０１７

福岡市教育委員会

麦野Ａ遺跡９

―麦野Ａ遺跡第 23 次・24 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1323 集



遺跡略号　MGA-23
調査番号　1441
遺跡略号　MGA-24
調査番号　1446

２０１７

福岡市教育委員会

序

北部九州は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方から交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも福岡市には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は共同住宅建設、農業用倉庫建設に伴う麦野Ａ遺跡第23次・24次発掘調査について報告するものです。この調査では弥生時代～中世末の遺構を検出するとともに、当時の集落にともなう遺物が多数出土しました。

これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、土地所有者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成29年3月27日

福岡市教育委員会
教育長　星子明夫

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建設・農業用倉庫建設に伴い、福岡市博多区麦野三丁目11番25、11番26、11番33、11番60、11番59において発掘調査を実施した麦野Ａ遺跡第23次・24次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理・報告書作成は、麦野Ａ遺跡第23次は受託事業および国庫補助事業、24次は国庫補助事業として実施した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構実測図の作成は清金良太（23次）、久住猛雄・清金（24次）が行った。
5．本書に掲載した遺物実測図の作成は、清金・松﨑友里・井上加代子（23次）、上方高広・久住（24次）が行った。
6．本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、久住・清金が行った。
7．本書に掲載した挿図の製図は、清金・松﨑（23次）、谷直子・小畑貴子・久住（24次）が行った。
8．本書に掲載した国土座標値は、世界測地系（第Ⅱ座標系）によるものである。
9．本書で用いた方位は座標北で、真北より０°18′西偏する（23次）。ただし24次の各遺構図には磁北を用いた。真北より約６°40′西偏する。
10．遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、溝をSD、土坑をSK、井戸をSE、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
11．23次は遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。24次は挿図ごとの番号としている。
12．本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
13．本書の執筆および編集は、23次を清金、24次と抄録を久住、全体を清金が行った。

遺　跡　名	麦野Ａ遺跡	調　査　次　数	第23次	遺　跡　略　号	MGA-23
調査番号	1441	分布地図図幅名	麦野012	遺跡登録番号	020048
申請地面積	1,065 ㎡	調査対象面積	415 ㎡	調　査　面　積	347 ㎡
調　査　地	福岡市博多区麦野三丁目11番25、26、33、60、59				
調査期間	平成27（2015）年１月５日～３月６日				

遺　跡　名	麦野Ａ遺跡	調　査　次　数	第24次	遺　跡　略　号	MGA-24
調査番号	1446	分布地図図幅名	麦野012	遺跡登録番号	020048
申請地面積	556.71 ㎡	調査対象面積	150 ㎡	調　査　面　積	155.4 ㎡
調　査　地	福岡市博多区麦野三丁目11番59				
調査期間	平成27（2015）年２月25日～３月27日				

本 文 目 次（1）

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．23次調査の記録 …… 7
　1．概要 …… 7
　2．遺構と遺物 …… 7
　　1） 掘立柱建物（SB） …… 7
　　2） 溝（SD） …… 9
　　3） 井戸（SE） …… 12
　　4） 土坑（SK） …… 14
　　5） その他の遺物 …… 16
　3．結語 …… 17

挿 図 目 次（1）

第１図　麦野Ａ遺跡位置図（１/25,000） …… 3
第２図　調査区位置図（１/1,000） …… 4
第３図　第 23・24 次調査区位置図（１/2,000） …… 6
第４図　第 23 次調査区全体図（１/150） …… 8
第５図　第 23 次調査土層図（１/40） …… 9
第６図　SB044 実測図（１/40） …… 9
第７図　SD001 実測図（１/30）および出土遺物実測図１（１/３） …… 10
第８図　SD001 出土遺物実測図２（１/３） …… 11
第９図　SE090・SE133 実測図（１/40）および SE090 出土遺物実測図１（１/３） …… 13
第10図　SE090 出土遺物実測図２（１/３） …… 14
第11図　SE133 出土遺物実測図（１/３、１/４） …… 15
第12図　SK053・SK054 実測図（１/60）および SK054 出土遺物実測図（１/３） …… 16
第13図　SK052・SK030・SK032・SK063 実測図（１/40） …… 17
第14図　SP075・SP079・SP089・SP097・遺構検出時出土遺物実測図（１/３） …… 17

第 23 次調査　図 版 目 次

PL. 1　全体写真
PL. 2　SD001
PL. 3　SE090・131
PL. 4　SE090・131 SK053・054
PL. 5　SK053・054・030・052・Ⅰ区壁面土層
PL. 6　遺物写真
表表紙写真　第 23 次調査Ⅰ区全景

本 文 目 次（2）

Ⅳ．第 24 次調査の記録 …… 25
1．調査の概要 …… 25
2．遺構と遺物 …… 25
1）検出遺構 …… 25
2）出土遺物 …… 37
3．調査のまとめ …… 40

挿 図 目 次（2）

第15図　麦野Ａ 24 次調査区全体図（Ｓ＝１/100）…… 26
第16図　調査区北壁横断土層図（Ｓ＝１/50）…… 27
第17図　SD001 土層図（Ｓ＝１/40）…… 28
第18図　SX003 東西土層図（Ｓ＝１/40）…… 28
第19図　SX002・003 平面図・断面図（Ｓ＝１/60）…… 29
第20図　SX002 断面図（Ｓ＝１/60）…… 30
第21図　SK004 平面図・断面図・土層図（Ｓ＝１/40）…… 31
第22図　その他の土坑・溝状遺構実測図（Ｓ＝１/40）…… 33
第23図　SB01 実測図・柱穴土層断面図（Ｓ＝１/40）…… 34
第24図　SB02 実測図（Ｓ＝１/40）…… 35
第25図　SD001・SX002・SX003 出土遺物実測図（Ｓ＝１/３）…… 36
第26図　SK004 出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１/3、一部1/４）…… 38
第27図　SK004（２）・SK011・SP（柱穴）他出土遺物（Ｓ＝１/３）…… 39

第 24 次調査　図 版 目 次

PL. 1　麦野Ａ 24 次調査状況全景
PL. 2　調査区北半遺構掘削状況、SD001 遺構掘削状況、SK004 と SB01
PL. 3　SK004、SD001・SD036・SX041、SX002、SX003
PL. 4　SX003、SX050、SK011、SB01 各柱穴
裏表紙写真　掘立柱建物SB01 と貯蔵穴竪穴SK004（東から）

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

平成 26（2014）年８月 20 日、土地所有者様より、福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）に麦野３丁目 11 番 25、11 番 62、11 番 33、11 番 60、11 番 59 における共同住宅建設、農業用倉庫建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である麦野Ａ遺跡に位置しており、照会地の西側では麦野Ａ遺跡第６・12 次調査が行われている。同課はこれを受けて平成 26 年 10 月 23 日、12 月５日に第 23 次調査範囲の試掘調査を行い、平成 27 年１月 28 日に第 24 次調査範囲の試掘調査を行った。試掘調査の結果、共同住宅建設部分（第 23 次調査地）では地表面下 105 cm、農業用倉庫建設部分（第 24 次調査地）では地表面下 55 cm で遺構が残存していることが確認された。申請者と同課は文化財保護に関する協議を持ったが、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅が建設される 374 ㎡、農業用倉庫が建設される 150 ㎡について、記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。調査は第 23 次調査を平成 27（2015）年１月５日～同年３月６日まで、第 24 次調査を平成 27（2015）年２月 25 日～同年３月 27 日まで実施した。

２．調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成 26 年度・資料整理：平成 28 年度）

調査総括：埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課）	課長	常松幹雄	
	同課調査第１係長	吉武学	
	同課調査第２係長	榎本義嗣	（26年度）
	同課調査第２係長	加藤隆也	（28年度）
庶　務：埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）	管理係長	内山広司	（26年度）
	管理係長	大塚紀宜	（28年度）
		川村啓子	（26年度）
		入江よう子	（28年度）
事前審査：埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）	事前審査係長	佐藤一郎	
	同課事前審査係主任文化財主事	池田祐司	
	同課事前審査係文化財主事	板倉有大	（26年度）
		大森真衣子	（28年度）
調査担当：埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課）	文化財主事	久住猛雄	
		清金良太	

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について施主様をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝します。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．麦野Ａ遺跡の立地

玄界灘に面しており、背後には脊振・三郡山系をひかえる福岡市は、これらより派生する山塊、丘陵によって区画される平野が展開している。東側から粕屋平野、福岡平野、早良平野、今宿平野と呼ばれており、今回報告する麦野Ａ遺跡第 23・24 次調査区は福岡平野に位置している。福岡平野は脊振山系からの那珂川と、牛頸山地からの御笠川によって形成された沖積平野であり、麦野Ａ遺跡は御笠川とその支流である諸岡川にはさまれた中位段丘上に位置する遺跡である。この段丘は、花崗岩風化礫層を基盤としており、Aso-４と呼ばれる阿蘇カルデラ起源の火砕流による八女粘土層、および鳥栖ローム層とよばれる堆積物からなる洪積台地である。麦野Ａ遺跡はこの丘陵地帯の一角に位置している。

この丘陵上に位置する遺跡には旧石器時代、縄文時代から現在に至るまでの人々の生活の痕跡が刻まれており、それは麦野Ａ遺跡も例外ではない。麦野Ａ遺跡と同じ段丘上には北側では高畑遺跡、板付遺跡があり、南側では麦野Ｂ遺跡、麦野Ｃ遺跡、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡が位置しており、浸食によって狭い谷の開析により、八つ手状に舌状の台地を派生させている。南側の遺跡はいずれの遺跡も鳥栖ローム層上面で遺構が検出されることが多い。また、南側に位置するこれらの遺跡は飛鳥時代末から平安時代初頭にかけての遺構が特に多い地域となっている。麦野Ａ遺跡が位置する台地は、南北約 1.2 km、東西約 0.4 km で、南北に細長い立地となっている。また、現在の地表面の標高は約 12 ～ 17 m を測る。現在は都市化が進み旧状をうかがうことは難しくなっているが、元々は広大な農地であったが、現在は田畑が所々に残っているのみである。

２．麦野Ａ遺跡と周辺の歴史的環境

周辺で最も古い遺物としては先土器時代の石器などが挙げられる。麦野Ａ遺跡第１次調査、麦野Ｂ遺跡第４次調査、雑餉隈遺跡第 10 次調査で検出され新期ローム層中に包含層を検出しているが、いずれも散漫な出土であり、量もわずかであった。南八幡遺跡第 12 次調査では集中的に分布することが確認されている。台地上の広い範囲にわたって分布することが明らかとなっている。

縄文時代の遺構・遺物としては、各調査において石鏃がわずかに出土したほか、麦野Ａ遺跡第 18 次調査、麦野Ｂ遺跡第３次調査、麦野Ｃ遺跡第３次調査では石鏃が出土しているが、晩期の刻目突帯文期に至るまでの明確な遺構・遺物は少ない状況である。南八幡遺跡第６・７次調査で「落とし穴」とされている土坑が検出されているが、遺物に乏しく時期を明確にするには至っていない。

弥生時代の遺構・遺物としては、麦野Ａ遺跡第 18 ～ 20 次調査において、前期後半～末頃の貯蔵穴、方形の住居址が検出され、台地尾根付近に集落跡、辺縁部に貯蔵穴が造られていたと推測されている。また、麦野Ｃ遺跡第１・５次調査において、前期末の方形住居・小児甕棺、後期初頭～後期前葉にかけての方形住居跡が検出されている。また雑餉隈遺跡第５次調査、南八幡遺跡第５次調査では方形の竪穴住居が散見される希薄な広がりをみせるが、南八幡遺跡第９次調査ではガラス小玉を伴う住居跡や掘立柱建物が検出され、同第 19 次調査では連鋳式の銅鏃鋳型が竪穴住居から見つかっており、雑餉隈丘陵では、南縁から西縁にかけて小規模な工房を持つ集落域が形成されていたのではないかと推測されている。

古墳時代に麦野遺跡では、明確な遺構は無く、弥生時代から連続して集落が営まれている形跡はなく、古墳時代前期から中期にかけての遺構はほとんどなくなる。古墳時代後期になると、南八幡遺跡

第２・３次調査で住居跡が確認されている。

古代以降になると、遺構・遺物共に増加する傾向をみせ、７世紀後半～９世紀初頭にかけての集落が検出されている。麦野Ａ遺跡第７次調査では、溝・柵列に伴う門跡が検出されており、８世紀初頭～９世紀初頭で２時期に区分されている。麦野Ｃ遺跡第５次調査では、竪穴住居 45 軒以上・掘立柱建物２棟以上と多数の建物跡が検出されている。東に位置する井相田Ｃ遺跡の間には、大宰府から北方向へとのびる官道が位置している。この官道に麦野Ｃ遺跡が近接した場所に位置しており、雑餉隈遺跡、南八幡遺跡、麦野Ａ遺跡では散漫な分布の住居址が麦野Ｃ遺跡第１・５・13 次調査では 70 棟と濃密な分布をみせるのは官道に対しての立地条件があげられており、住居は数回建て替えが行われるなど、長期的に集落が展開していたことがうかがえる。雑餉隈遺跡第９次調査では、８世紀後半頃のＬ字形に配置する掘立柱建物が２棟検出されている。周辺には大宰府、水城、大野城、大宰府と鴻臚館をつなぐ官道などの重要な施設が多くあり、これらの維持・管理などにあたる人々の居住スペースなのではないかと推測されている。また同５次調査では 50 棟を超す竪穴住居跡が検出されている。しかし、古代の遺構は９世紀に入ると急速に減少しており、麦野Ａ遺跡の第３・15 次調査で井戸や土坑が検出されており、柱穴から掘立柱建物の存在が考えられている。

中世は麦野Ａ遺跡第１次調査で 15 ～ 16 世紀にかけての掘立柱建物が検出され、また第４次調査では 12 世紀後半から 13 世紀初頭の掘立柱建物・土坑などがみつかっている。麦野Ｃ遺跡内に位置する日吉神社境内には嘉暦３（1328）年の銘を刻む板碑があり、中世の集落が丘陵上に存在していた可能性がある。今回第 23 次調査で報告する溝については、第 18 次、第 20 次調査では堀状遺構であると指摘され、北西、南西の第６次、第９次、第 23 次調査出土の溝と併せて方形のプランを持っている。遺物の出土がわずかではあるが、戦国期の陶磁器類が出土している。近世の編纂物である「豊前覚書」には、天正９（1581）年に戸次鑑連が麦野村に軍勢を置いたとする記事がみられ関連が注目される。

次数	調査番号	所　在　地	調査面積（㎡）	報告書	時　期	遺跡の概要
1	8232	麦野 1-28-56	600	107 集	中世後半	中世：井戸、掘立柱建物
2	8337	麦野 5-24	80	1162 集		奈良：井戸
3	9116	麦野 4-14-23	247.4	275 集	古代、中世	奈良：竪穴住居、土坑 中世：掘建柱建物
4	9316	麦野 1-27-3、5	134	409 集	古代	平安：井戸
5	9412	麦野 1-27-1、2	6	年報 9	古代	奈良：井戸、土坑
6	9824	麦野 3-11-29	224	867 集	古代、中世	奈良：竪穴住居、溝 平安：井戸、土坑 中世：土坑、溝
7	9972	麦野 5-2-33、36	460	867 集	古代、中世	奈良～平安：溝、掘立柱塀 中世：掘立柱建物、溝
8	5	麦野 3-10-10	178	774 集	古代	古代：竪穴住居、掘立柱建物
9	31	麦野 3-10-10	62.2	未刊	中世後半	中世：土坑、溝
10	61	麦野 5-2-33	405	719 集	古代、近世	古代：竪穴住居、掘立柱建物 近世：井戸、溝
11	139	麦野 4-11-5	130	867 集	縄文、古代	縄文：落とし穴 奈良：竪穴住居
12	155	麦野 3-11-28、57、81 ～ 84	80	年報 16	古代	古代：柱穴
13	156	麦野 2-1-8	250	867 集	古墳、古代	古墳：土坑 平安：竪穴住居、掘立柱建物
14	367	麦野 5-5-39	260	859 集	古代	古代：竪穴住居、掘立柱建物
15	516	麦野 5-1-41	91.4	年報 20		
16	529	麦野 1-29-12	26	年報 20		
17	619	麦野 5-1-40、34、35	336	年報 21		
18	704	麦野 3-10-12	1,565	1054 集	弥生、古代、中世	弥生：貯蔵穴、竪穴住居、落とし穴 古代：竪穴住居 中世：溝
19	724	麦野 5-8-27、8-20、34	374.8	1055 集	弥生、古墳後期、近世	弥生：貯蔵穴 古墳：竪穴住居、土坑 近世：溝
20	755	麦野 3-10-11　他	515.5	1056 集	弥生、古代、中世	弥生：竪穴住居、貯蔵穴 古代：竪穴住居、土坑 中世：溝
21	863	麦野 5-3-30、41	134.2	未刊		
22	1318	麦野 2-17-20	110.05	1298	弥生、古墳、古代	
23	1441	麦野 3-11-25、11-33、11-60、11-62	347	本報告	古代、中世	古代：柱穴 中世：戦国時代の溝
24	1446	麦野 3-11-59	155.4	本報告	古代、中世	古代：遺物のみ 中世：溝、穴倉、掘立柱建物、凹み状遺構
25	1524	麦野 3-2-6	32	未刊	古代	
26	1602	麦野 2-3-1	84	未刊	古代	

第１表　麦野Ａ遺跡調査一覧表

1 麦野Ａ遺跡　2 比恵遺跡群　3 山王遺跡　4 那珂遺跡群　5 五十川遺跡　6 井尻Ａ遺跡
7 那珂君休遺跡　8 板付遺跡　9 高畑遺跡　10 諸岡Ａ遺跡　11 諸岡Ｂ遺跡　12 井尻Ｂ遺跡
13 寺島遺跡　14 笠抜遺跡　15 笹原遺跡　16 三筑遺跡　17 麦野Ｂ遺跡　18 麦野Ｃ遺跡
19 南八幡遺跡　20 雑餉隈遺跡

第１図　麦野Ａ遺跡位置図（１/25,000）

第２図　調査区位置図（１/1,000）

第３図　第 23・24 次調査区位置図（1 /300）

Ⅲ．第 23 次調査の記録

１．概要

今回報告する麦野Ａ遺跡第 23 次調査区は、福岡市博多区麦野三丁目 11-25、11-26、11-33、11-60、11-59 に所在し、調査前の現況は標高約 13.6 m を測る家屋解体後の平地であった。調査地点は遺跡の中央部に位置し、隣接する西側では第６、12、24 次調査が行われており、東側では第８、９、20 次、北東側では第 18 次の各調査が実施され、更にその周囲でも調査が進んでいる。

本調査区は、周辺の標高と比較して最高点付近に位置しており、試掘の段階で戦国時代とされる溝の存在が明らかとなった。

本調査区は表土および客土を除去し約 12.4 m 付近で鳥栖ローム層に起因する遺構面があり、遺構面はほぼ平坦であった。また調査区には古井戸があり、今回の調査では古井戸は除く調査区を設定した。調査区の南側は、溝、土坑を除いて遺構密度は希薄であるが、調査区の北側にいくと井戸、土坑などを検出し遺構密度が濃かった。遺構面の標高は南西端部で 12.4 m、北東端部で 12.5 m を測るほぼ平坦な地形であった。

遺構検出は遺構面上面までを重機で剥ぎ取って実施したが、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、古代から戦国時代までの掘立柱建物、溝、井戸、土坑等を主体として確認できた。出土遺物量は、コンテナケースにして６箱である。

発掘調査は平成 27（2015）年１月５日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、翌日に発掘器材やリース器材を搬入した。その後、外柵設置や壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、７日から遺構検出を開始した。その後順次、南西側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、平板、１/20 縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した２月 27 日に高所作業車による全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け、重機による埋め戻し等を終え、３月６日に第 23 次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「Ⅰ．－１．調査に至る経緯」のとおり、374.0 ㎡であった。調査時の遺構番号は、001 から３桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にＰ１から順に番号を付した。

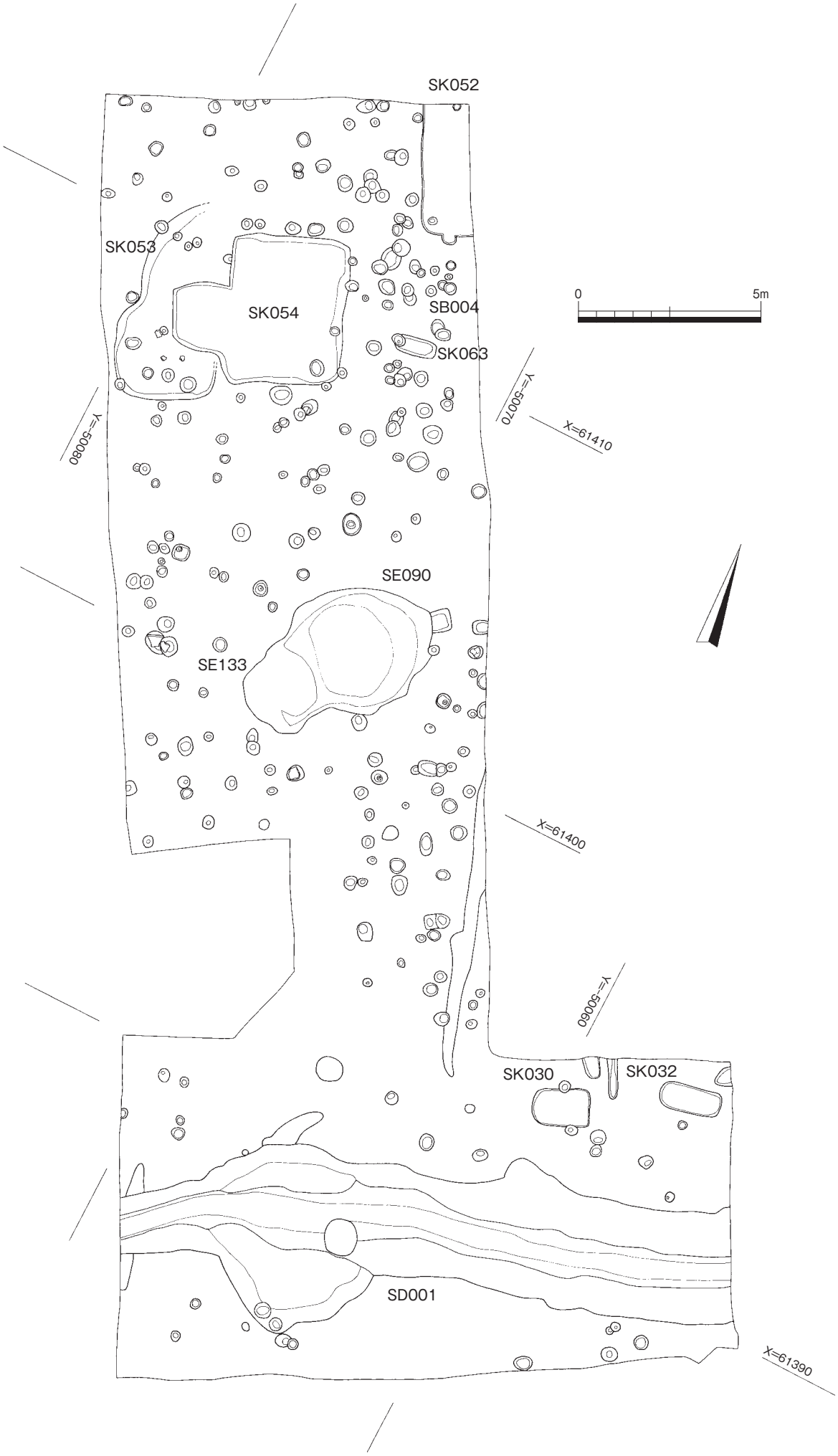
２．遺構と遺物

以下、遺構種別に報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における日本測地系による 10 m単位の平面座標を基準とした英字（西から東にＡ～Ｄ）と数字（北から南に１～４）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第４図）。

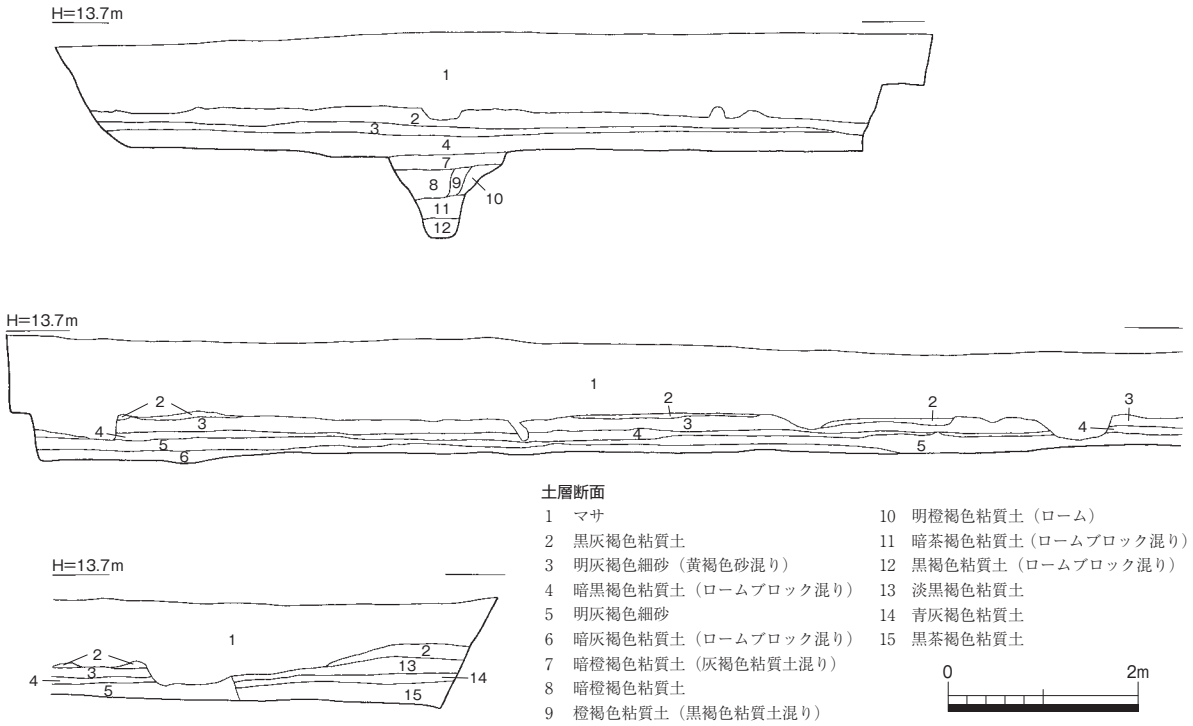
１）掘立柱建物（SB）

調査終了後に抽出した１棟の掘立柱建物について報告する。今回報告する掘立柱建物の周辺には多数のピットがあり、その他井戸周辺にはピットの中に石が敷いてあるものがみられた。建物としてまとまるか検討を行ったが復元には至らなかった。

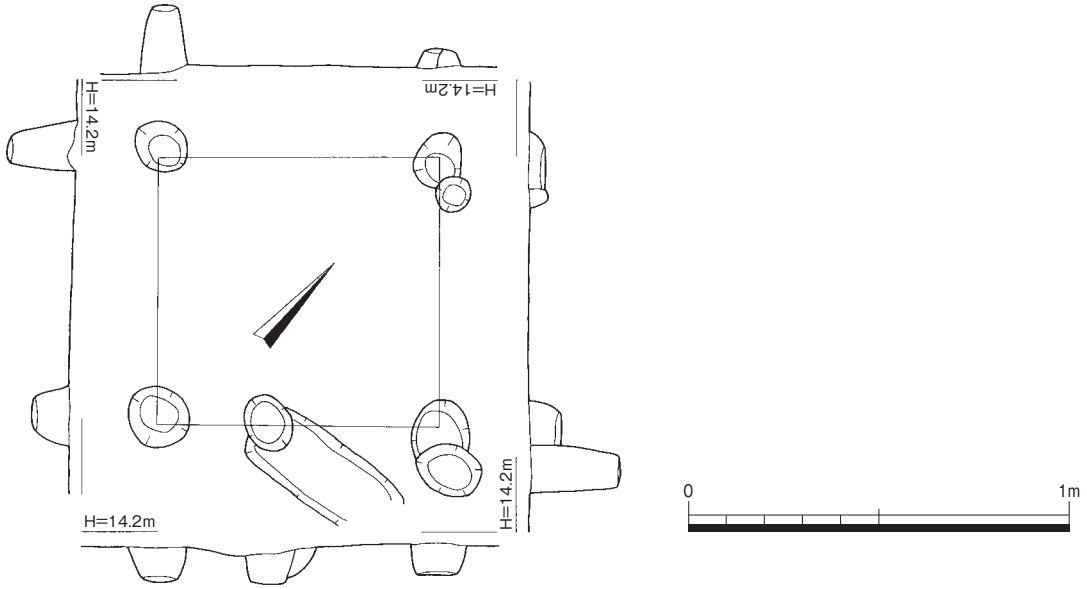
SB044（第４、６図） 調査区のＢ－１で検出した。１間×１間の建物である。柱間の長さは 1.4 ～ 1.5 mである。柱穴は円形・楕円形であり、径 0.28 ～ 0.32 m、深さ 0.1 ～ 0.4 mを測る。覆土は茶



第４図　第 23 次調査区全体図（１/150）



第５図　土層断面実測図（１/80）

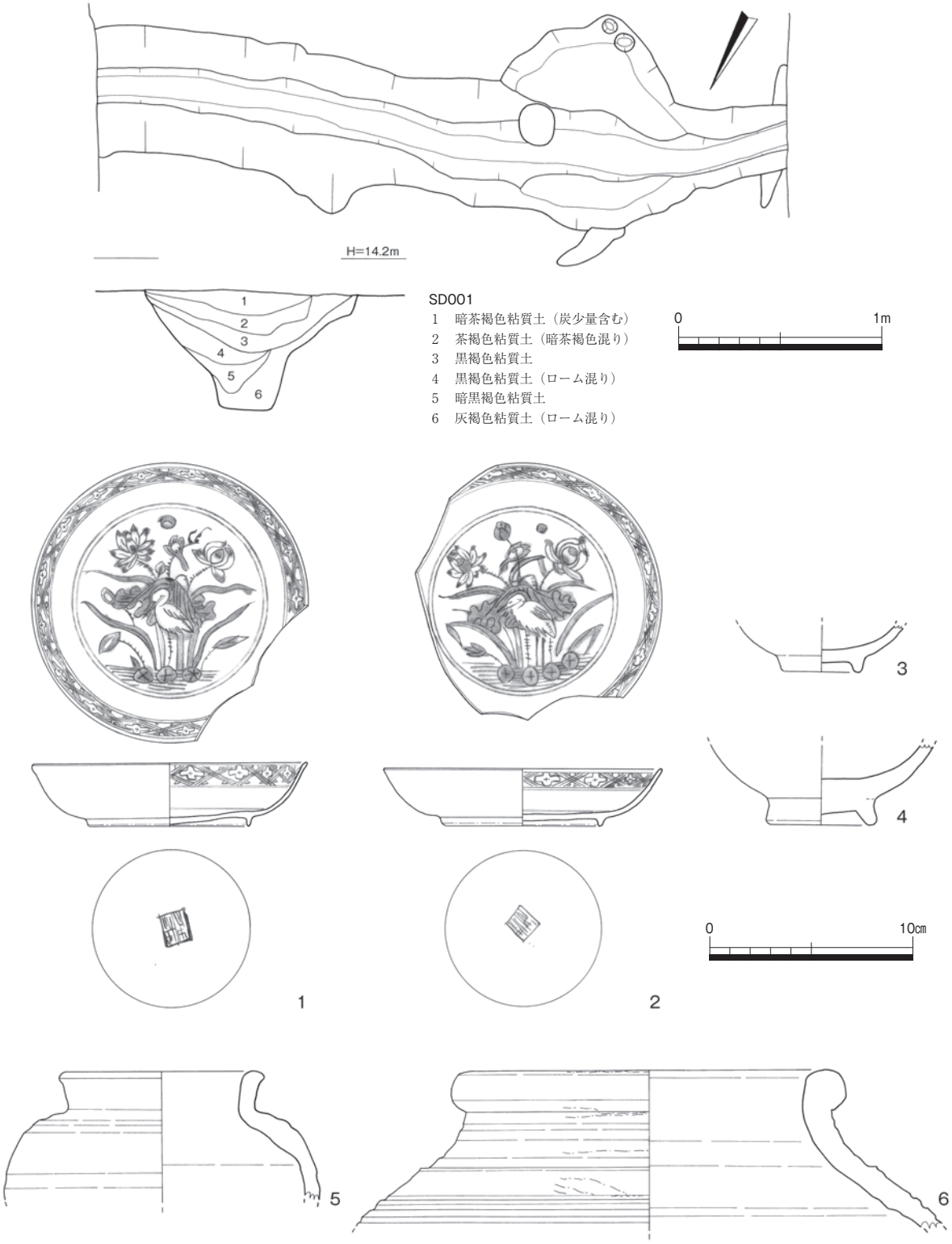


第６図　SB044 実測図（１/40）

褐色粘質土を主体とする。

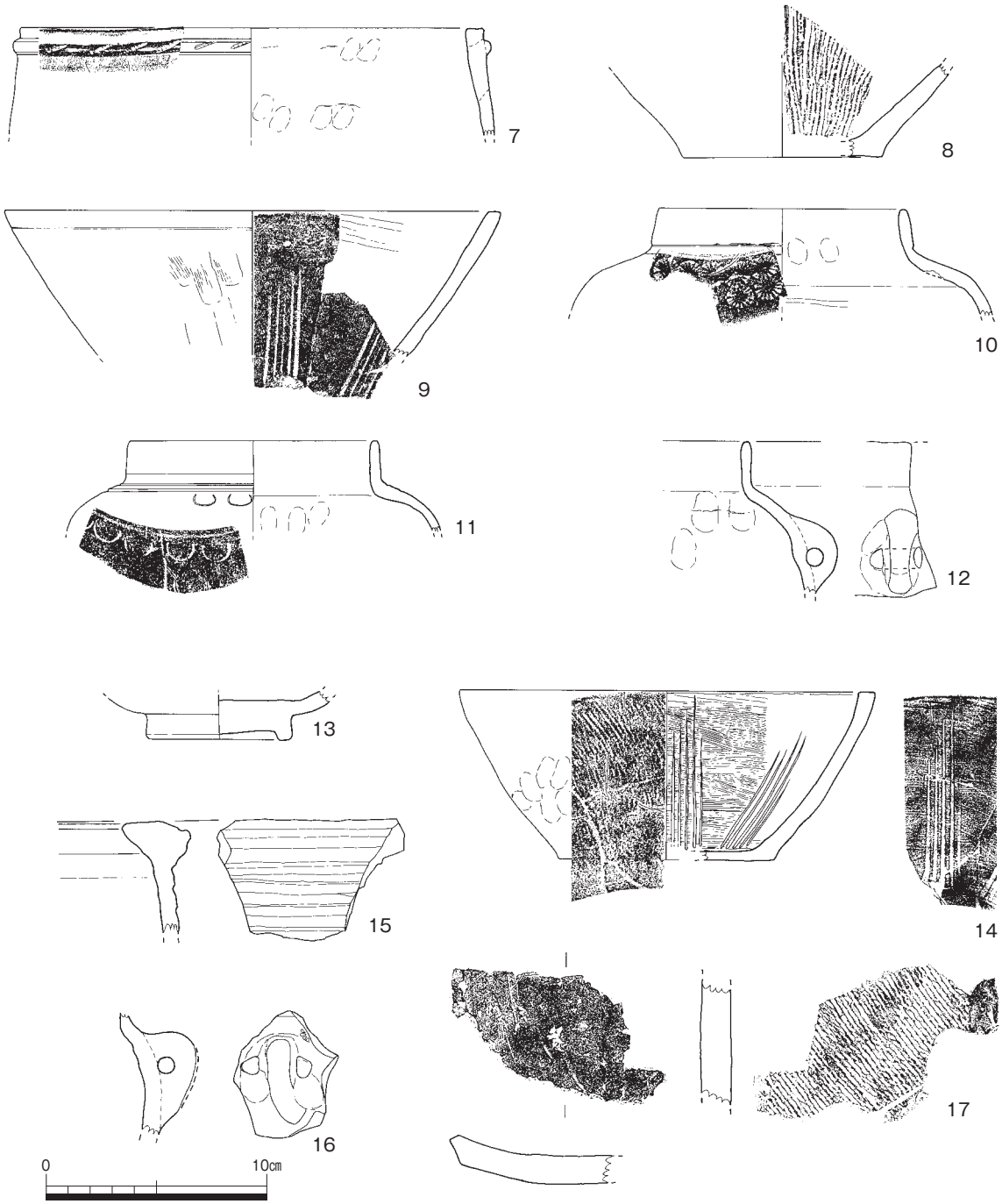
２）溝（SD）

SD001（第４、７、８図）調査区のＣ－3. 4、Ｄ－3. 4で検出した。北東－南西方向に伸びる溝で、両端は調査区外に伸びる。上面幅約 2.2 m、底面幅約 0.45 m、深さ約 1.2 mを測る。断面は箱堀状を呈している。土層観察によると少なくとも３回掘り直しがあったのではないかと考えられる。また、同じく覆土に水成堆積物が認められないことから、空堀であったと考えられる。



第７図　SD001 実測図（１/60）および出土遺物実測図（１/３）

出土遺物（第４、７図）　１、２は肥前磁器の染付皿である。１は口径 13.5 cm、底径 8.0 cm、高さ 3.0 cm である。２は口径約 13.5 cm、底径 7.6 cm、高さ 3.0 cm である。１、２は内面が口縁部に四方襷文、見込みに花鳥文を持ち、高台内には銘が書かれている。高台の端部は露胎である。３、４



第８図　SD001 出土遺物実測図（１/３）

は椀である。３は底径 3.8 cm、高さ 2.1 cm が残る。内面外面共に回転ナデで仕上げる。４は底径 5.0 cm、高さ約 4.0 cm が残る。内面外面は回転ナデ、高台内は回転ヘラ削りが確認できる。３・４は共に近世である。５、６は陶器の壺である。口径約 10.0 cm で、内面外面共に回転横ナデが確認できる。また、内側が黒ずんでいる。６は口径約 19.2 cm で、内面外面共に横ナデで仕上げる。頸部付近には自然釉がかかり、胴部には沈線が確認できる。７は瓦質の深鉢である。口径は約 28.0 cm である。内面は指押え、ナデ、口縁部にかけて横ナデがみられる。また突帯には刻み目が確認できる。８、９は土師質の擂鉢である。８は底径約 12.0 cm、内面には粗く密な摺目が残る。９は土師質で口径約 30.0

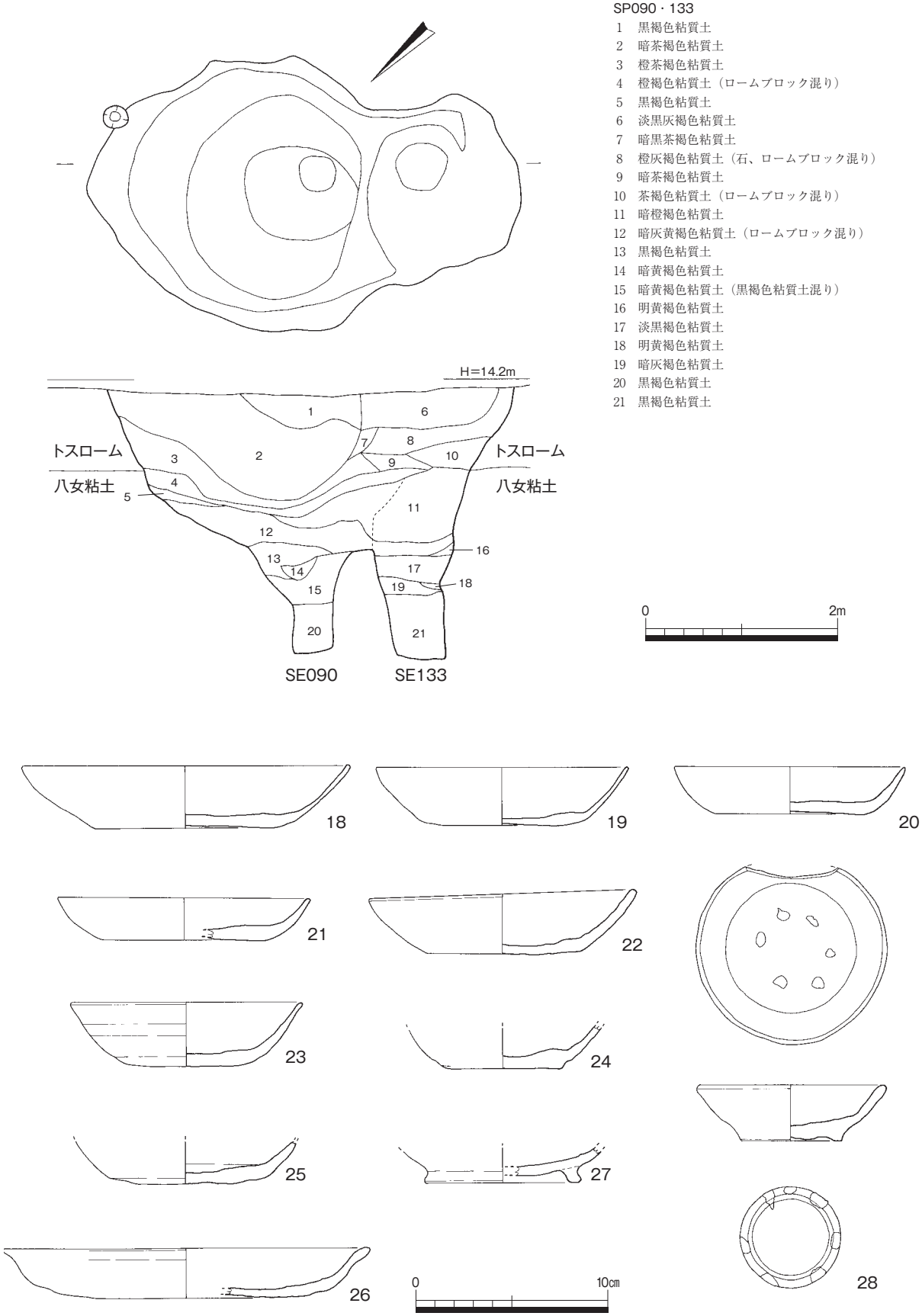
cmである。内面には５本単位の摺目、内面上部には粗いハケ目、口縁部から外面にかけてナデが確認できる。10～12は土師質の茶釜である。10は口径約10.0 cm、外面肩部にはスタンプ文がみられる。内面下部は強い横ナデがみられる。11は口径約15.0 cm、器面は磨滅しており、内面に指押えが確認できるのみである。外面にはスタンプ文が確認できる。12は口縁部からつまみにかけての小片が残る。つまみには径0.8 cm程の穿孔が確認でき、内面は指押えがみられる。13は龍泉窯の青磁碗である。底径6.3 cm、高さ約2.2 cmが残る。釉薬は内面外面には見られるが、高台底部は釉薬をかきとっている。また高台内は回転ヘラ削りがみられ、露体である。14は土師質の擂鉢である。口径約25.0 cm、底径約13.0 cm、高さ10.2 cmである。内面には５本単位の摺目がみられ、内面全体をハケ目で仕上げる。外面はタタキの後、下部ではナデが、底部ではナデが確認できる。15は近世陶器の鉢である。口縁部は無釉であるが、内面外面共に白く濁った釉薬のようなものがかかる。16は土師質の茶釜である。内面外面共にナデ、もしくは指押えで仕上げる。また、把手部には径0.8 mの穿孔がみられる。17は平瓦である。外面はタタキ、内面には布目痕が残る。

３）井戸（SE）

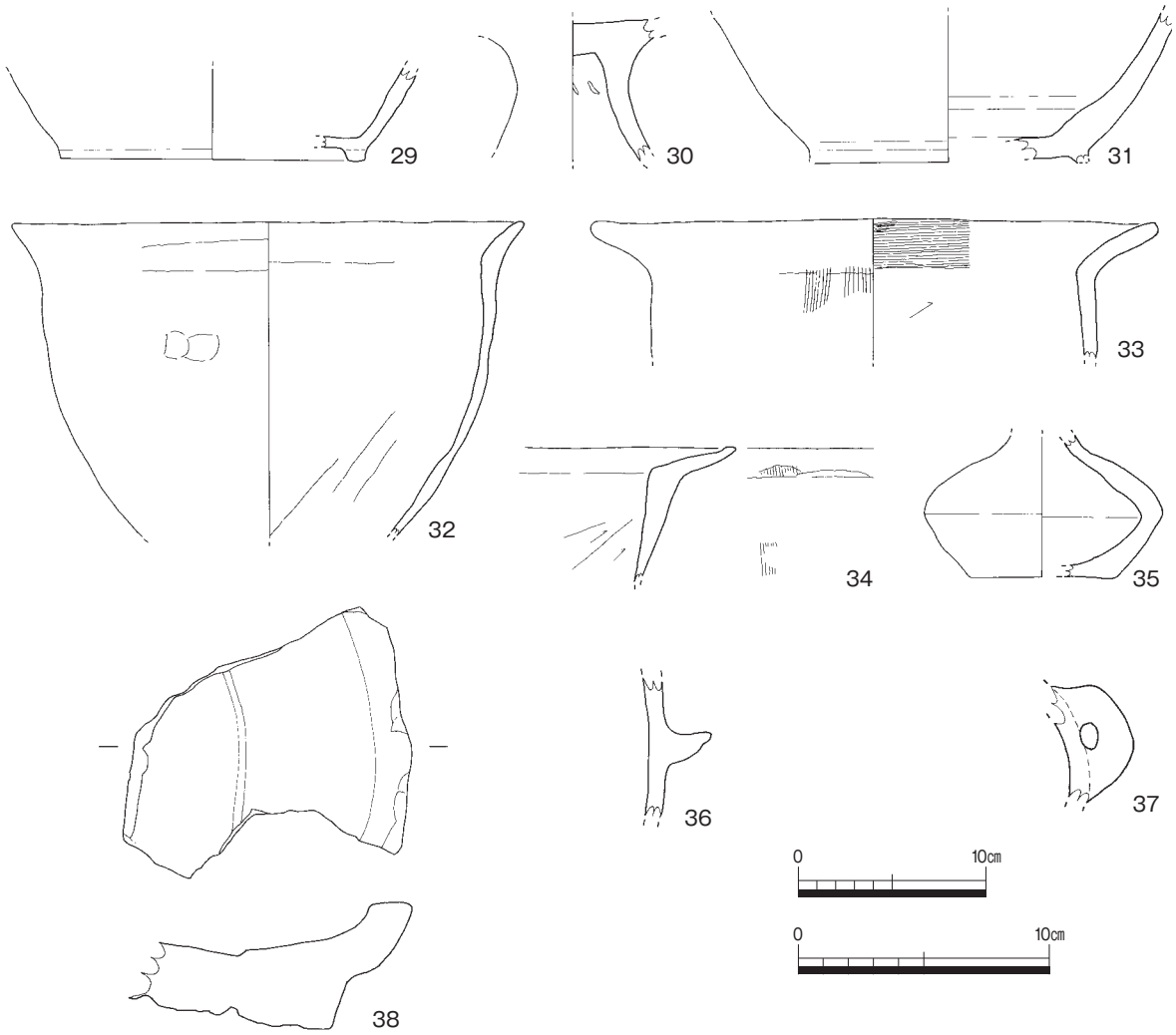
SE090、133（第４、９、10、11図）Ｂ－2．3、Ｃ－2．３で検出した。初めはSE090のみと思われたが、掘方が広かったことから２基の井戸があることも想定して堀進めていた。土層図の12を掘り上げた時にもう１基の井戸がみつかりSE133とした。なお、SE133の方がSE090よりも古い。

SE090　標高約12.3 mから水が湧き出す円形の井戸である。SE133を埋めて新しくすぐ横に掘った井戸で、土層図の12より上はSE090、SE133ともに埋まったようである。SE090は深さ2.7 m、幅4.2 mである。埋没時期としては1300年頃と考えられる。

出土遺物（第9、10図）　18、20～25は土師器の坏である。18は口径16.6 cm、底径9.4 cm、高さ3.2 cmである。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。19は須恵器の坏である。口径13.0 cm、底径5.6 cm、高さ3.0 cmである。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。20は口径12.0 cm、底径8.0 cm、高さ2.4 cmを測る。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。21は口径約13.0 cm、底径約8.4 cm、高さ2.2 cmである。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。22は口径13.8 cm、底径5.6 cm、高さ2.8～3.4 cmを測る。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。23は口径12.0 cm、底径4.0 cm、高さ3.3 cmである。回転ナデで仕上げ、底部はヘラ切りである。24は底径6.0 cm、残存高は約2.3 cmである。回転ナデで仕上げ、底部はヘラ切りである。25は底径8.0 cm、残存高は約2.2 cmである。回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。27は瓦器埦で底径約8.0 cm、残存高は1.7 cmである。回転ナデで仕上げる。26は須恵器の坏（盤）で口径約19.0 cm、底径約10.2 cm、高さ2.6 cmであり、回転ナデで仕上げる。28は高麗時代の雑釉陶器の碗である。口径9.8 cm、底径5.2 cm、高さ2.9 cmである。胎土は淡灰褐色であり、表面は施釉されている。また、内面、外面共に６～７か所の目跡が確認できる。29は須恵器の坏であろうか。底径約12.0 cm、残存高約3.7 cmである。回転ナデで仕上げる。30は須恵器の高坏である。残存高5.6 cmである。内面上部はシボリ、その下はナデである。外面はナデが確認できる。31は須恵器の壺である。底径約11.0 cm、残存高5.9 cmである。内面外面共に回転ナデで仕上げる。32は土師器の甕である。口径約20.2 cm残存高約12.4 cmである。内面上部はナデが確認できる。外面はナデ、指押えがみられ、煤の付着も確認できる。33は土師器の甕である。口径約30 cm、残存高が約7.4 cmである。内面の口縁部から頸部にかけてハケ目、それより下は削りが確認できる。外面は口縁部から頸部にかけてナデ、それより下はハケ目がみられる。34は土師器の甕である。残存高は5.3 cmである。内面は削り、外面はハケ目が確認できる。35は須恵器のハソウである。底径約5.5 cm、胴部最大径は約9.4 cm、残存高は5.5 cmである。



第９図　SE090・133（１/40）および SE090 出土遺物実測図（１/ ３）



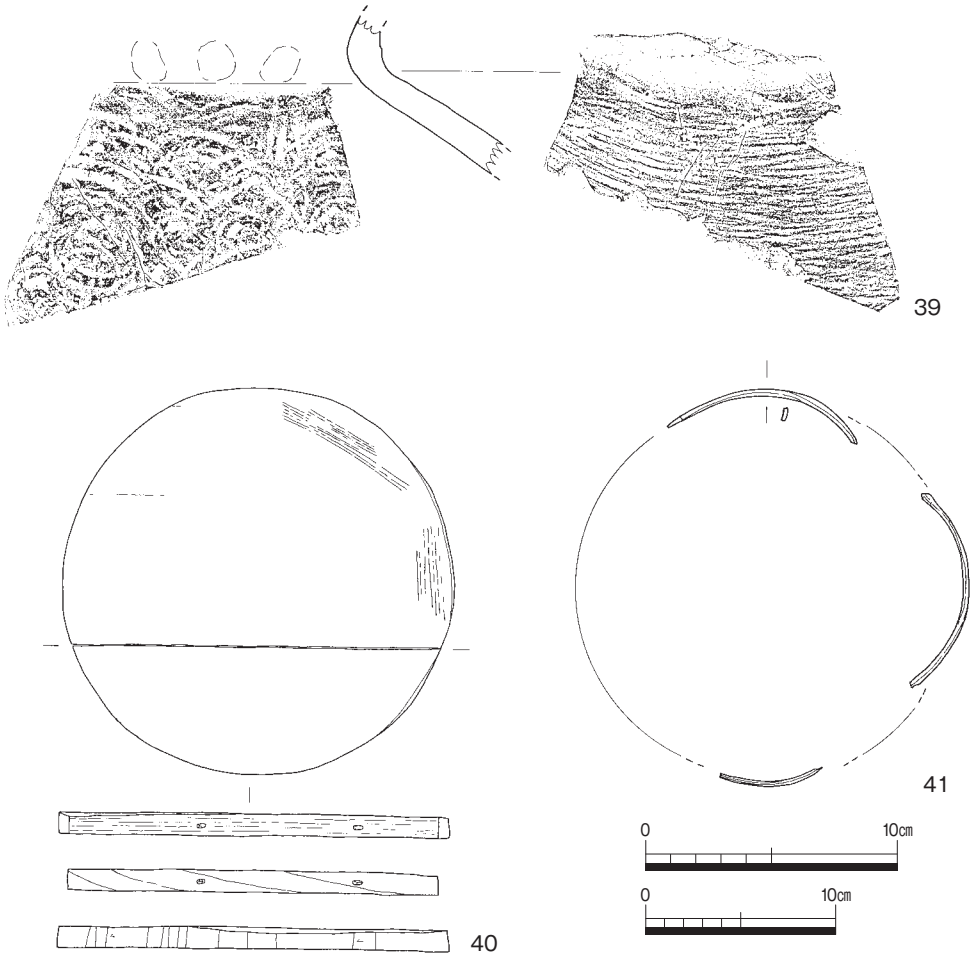
第 10 図　SE090 出土遺物実測図（38 は 1 / 4 、他は 1 / 3 ）

内面外面共に回転ナデで仕上げる。今回の調査では穿孔部分は出土しなかった。

36 は土師質の釜である。残存高は 5.6 cm である。突帯の先端が黒く焼けている。37 は土師質の釜である。残存高は約 4.7 cm である。内面には指押えが確認でき、外面の穿孔は 1.0 cm を測る。38 は茶臼の下臼であろうか。直径約 36.0 cm を測る。内面、外面は綺麗に面取りをしているが、底部は面取りが見られない。

SE133　標高約 12.2 mから水が湧き出す井戸である。土層の体積から SE090 より SE133 の方が古い。深さ 2.8 mの井戸で、掘方は SE090 と重複しているため不明である。年代としては、SE090 よりも古い。

出土遺物（第 11 図）39 は須恵器の甕である。残存高は約 6.2 cm で、胎土は緻密である。内面頸部は指押えの後ナデ、頸部から下は同心円状の当て具痕がみられる。外面頸部はナデ、頸部から下は横方向の平行タタキである。40、41 は曲物である。40 は径 20.8 × 20.5 の円形で厚さが 1.2 cm である。２枚の板で構成され、板の継ぎ目には 0.5 × 0.2 cm 程の穴が２か所ずつみられ、細い棒状の木で固定していたのがうかがえる。また、側面には削り痕が確認できる。41 は樹皮でできており、木製品（曲物）の固定に使用したものであると考えられる。



第 11 図　SE133 出土遺物実測図（40、41 は 1 / 4 、39 は 1 / 3 ）

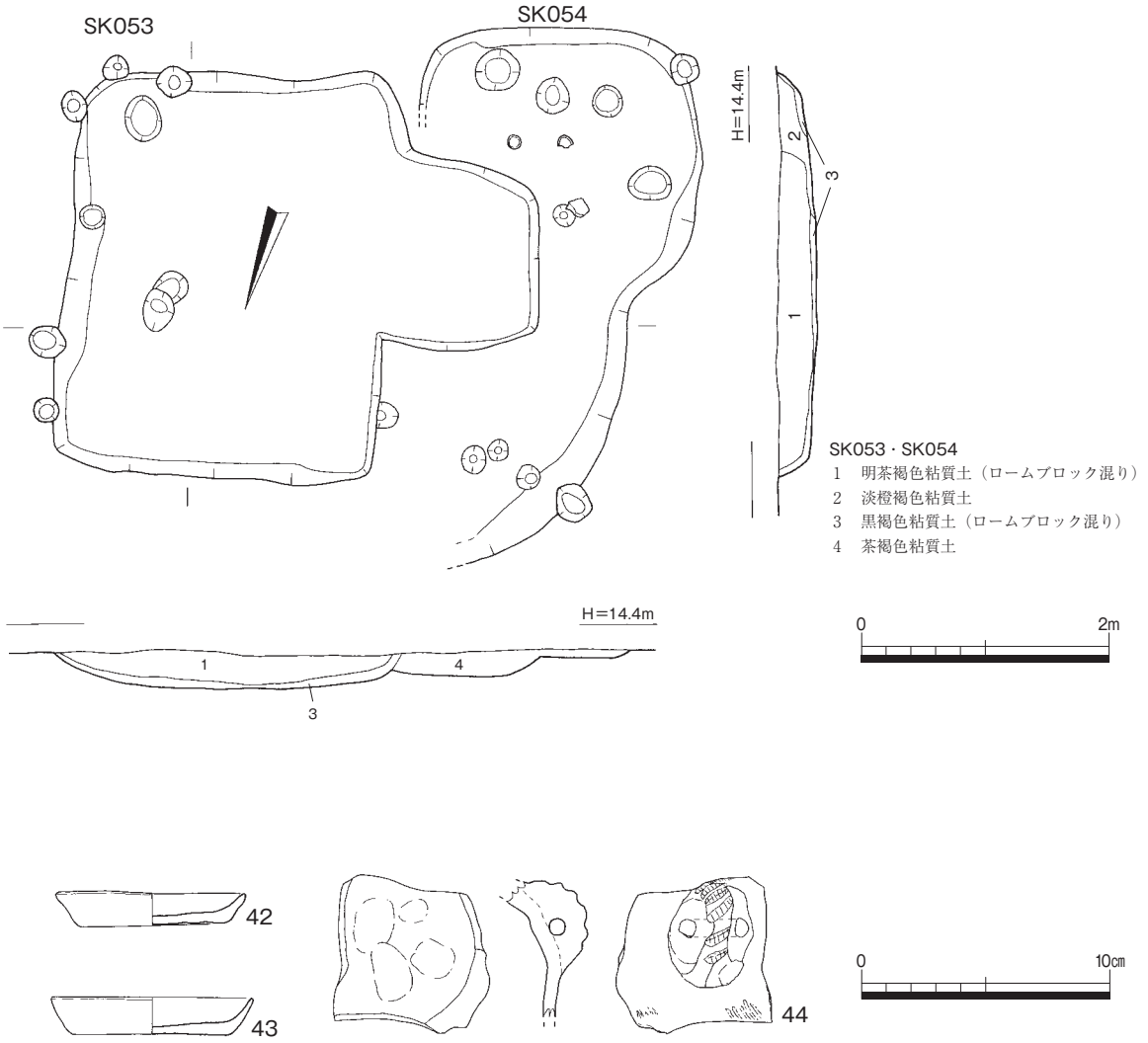
4 ）土坑（SK）

SK053、054（第 12 図）　SK053 と SK054 は一部が重なるように検出された。SK053 は南北 3.3 m × 東西 3.55 m を測る、T 字型の土坑である。SK053 の年代は 1300 年代と考えられ、SK054 はそれよりも後の年代と考えられる。

出土遺物（第 12 図）　42、43 は土師器の小皿である。42 は口径 7.5 cm、底径 5.8 cm、高さ 1.4 cm である。調整は不定方向のナデが全面に認められ、底部は糸切りである。43 は口径 8.0 cm、底径 6.2 cm、高さ 1.5 cm を測る。調整は回転ナデであり、底部には糸切りが認められる。44 は土師質土器の釜の把手部分が残る。内面はナデ、外面下部はタタキの後ナデ、把手部分はナデの後に刻み目を施す。以上の 3 点はいずれも SK054 からの出土であり、SK053 から出土したものは細片ばかりであった。戦国期の土坑である。

SK052（第 4 、13 図）　B − 3 で検出した。初め竪穴住居かと思われたが、掘り進めていくと、陶磁器辺が出てきたため、土坑であると判断した。埋土は暗茶褐色粘質土であり、東に向かって深くなっている。

SK030（第 4 、13 図）　C − 3 、D − 3 で検出した。幅 0.79 m、長さ 1.28 m、深さ 0.3 m を測る土坑であり、埋土は淡茶褐色粘質土（ローム混り）である。陶磁器片が出土したが図化はできなかった。



第 12 図　SK053・054 実測図および SK053 出土遺物実測図（1／3）

SK032（第４・13 図）　D－３で検出した。幅 0.6 m、長さ 1.4 m、深さ 0.22 mを測る。SK030 の幅を小さくしたような形である。埋土は SK030 と同じく淡茶褐色粘質土（ローム混り）であり、一度に埋まったと考えられる。

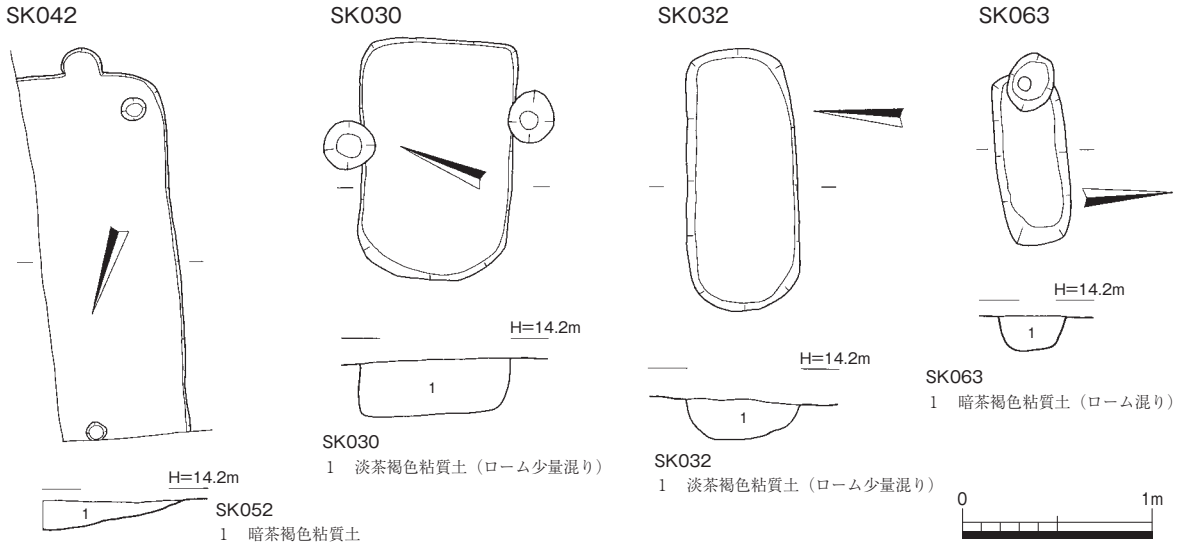
SK063（第４、13 図）　B－１で検出した。幅 4.2 m、長さ約 0.9 m、深さ 0.18 mの土坑である。これも同じく埋土は暗茶褐色粘質土であり、一気に埋められたのではないかと考えられる。

５）その他の遺物

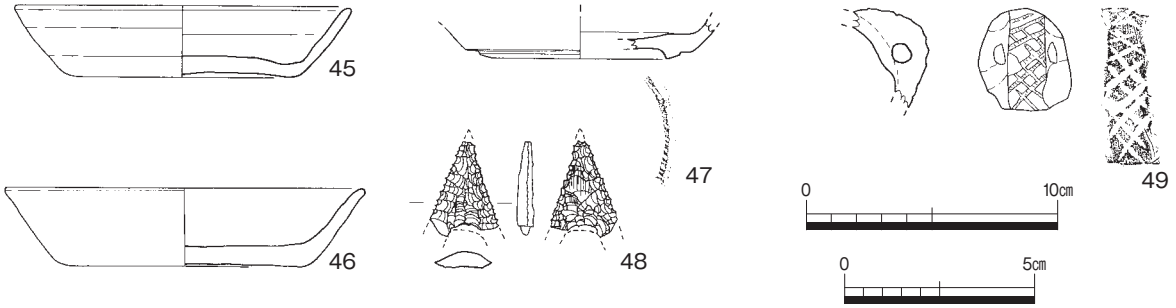
SP089（図４）B－２で検出した。45 は土師器の坏である。復元口径約 13.4 cm、底径 8.7 cm、高さ 2.9 cm である。内外面ともに回転ナデで仕上げ、底部には糸切りがみられる。13 世紀代のものである。

SP079（図４）B－２で検出した。46 は土師器の坏である。復元口径約 14.0 cm、底径 9.0 m、高さ 3.1 cm である。内外面ともに回転ナデで仕上げ、底部には糸切りがみられる。年代は SP089 と同じく 13 世紀代と考えられる。

SP075（図４）B－１で検出した。47 は須恵器の坏身である。復元高台径 6.8 cm、高さ約 1.7 cm



第 13 図　SK0030･032･052･063 実測図（1 /40）



第 14 図　ピット・遺構検出時出土遺物実測図（1 / 3）

が残る。内外面ともに回転ナデで仕上げ、高台部分には刻目が残る。

SP097（図 4）B-2 で検出した。48 は黒曜石の石鏃である。長さ約 2.5 cm、幅約 1.8 cm、厚さ 0.4 cm が残る。

遺構検出時出土遺物 49 は土師質の土器であり、釜の把手部分である。内面はナデ調整、外面には格子状の刻み目が確認できる。

３．結語

SD001 について

SD001 は 16 世紀代に位置付けられ、第６、９、18、20、23 次では同じように中世後期に掘削された溝がひろがる。９次調査は報告が未刊であり、詳しいことはわからないが、第６、18、20、23 次についてみていくこととする。

第６次調査 SD14

第６次調査区の西端で検出し、両端とも発掘区外へ伸びる。幅３ｍ、深さ 90 ｃｍである。底は平らで箱堀の形状をなす。中世後期に掘削され、近世以降に埋没したと考えられる。上層は近世以降の堆積である。

第 18 次調査 SD04

第 18 次調査区の中央から南部にかけて検出した溝である。幅は 2.5 ｍ～７ｍを測り、深さは深い部分では２ｍと非常に大規模な溝である。Ｌ字形を呈し、溝の角が検出されている。断面は逆台形を呈しており、複数回の掘り直されたようであり、滞水していた状況はうかがえない。おそらく屋敷地を囲む区画溝である。

第 20 次調査 SD008

第 20 次調査区の西側の落ち際に位置する溝で、北西－南東方向に直線的に延長し、両側は調査区外に伸びる。上面幅 3.0 ～ 3.5 ｍ、底面幅 0.4 ｍ前後、深さ 1.7 ｍ前後を測り、断面は箱掘状を呈する。壁面には、テラスや段が複数認められたが、土層観察によると数度の掘り直しによるものと考えられる。また、覆土には水成堆積物が顕著に認められないことから、空堀であった可能性が高い。出土遺物から 16 世紀代の溝に位置付けられる。

第 23 次調査 SD001

第 23 次調査区の南側で検出された。北東 － 南西方向に伸びる溝で、両端は調査区外に伸びる。上面幅約 2.2 ｍ、底面幅約 0.45 ｍ、深さ約 1.2 ｍを測る。断面は箱堀状を呈している。土層観察によると少なくとも３回掘り直しがあったのではないかと考えられる。また、同じく覆土に水成堆積物が認められないことから、空堀であったと考えられる。出土遺物から 16 世紀代の溝に位置付けられるが、上層からは江戸期の磁器が出土しており、そのころまで屋敷として使用されていた可能性が考えられる。

以上、堀の一部を検出した調査を見てきたが、東辺については第９、18 次で屈曲部が検出されており、方形区画の東辺を復元することができる。西辺については、第６次調査出土の溝を想定しているが、溝は箱堀ながらも底面の幅が広いが、同時期の遺物が出土しているため SD14 を当てて復元した。

第 20 次調査報告でも記載されているが、復元区画は内法で南北約 110 ｍ、東西約 150 ｍを測る規模となる。溝の掘削時期や形状、出土遺物などから戦国期の城館の周りに掘削された空堀であった可能性が高い。また、第６次調査の西側の道、第 23 次調査の南側の道で区切られ、そこから堀・内部へと続いているのではないか。なおそこで注目されるのは、近世の編纂物『豊前覚書』の記事である。天正９（1581）年に戸次鑑連が筑紫広門の那珂郡侵入に備えて、麦野村に軍勢をおいたという記事が想起されるが、それを裏付ける資料に欠き確証は無い。第 23 次調査では溝、井戸、土坑と戦国期の遺構が確認されたが、今後さらに城館構造を明らかにしていく必要がある。

〈参考文献〉

『麦野Ａ遺跡５』福岡市埋蔵文化財調査報告第 1054 集　2009　福岡市教育委員会
『麦野Ａ遺跡７』福岡市埋蔵文化財調査報告第 1056 集　2009　福岡市教育委員会

(1)　Ⅰ区全体写真（東から）

(2)　Ⅱ区全体写真（南東から）

(3)　SD001（北東から）

(4)　SD001 土層断面（北東から）

(5) SE090・131 完掘状況（北西から）

(6) SE090 木製品出土状況（北西から）

(7) SE090・131
上部土層断面
（北西から）

(8) SE090・131
下部土層断面
（北西から）

(9) SK053・054
土層断面（南西から）

⑽　SK053・054 土層断面（北西から）

⑾　SK030 土層断面（南西から）

⑿　SK030 完掘状況（南西から）

⒀　SK052 土層断面（北西から）

⒁　Ⅰ区壁面土層（北東から）

⒂　Ⅰ区壁面土層（北東から）

PL. 6

1

2

10

14

6

23

22

28

21

20

35

38

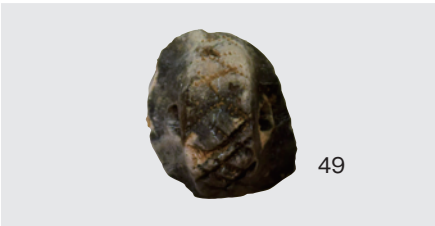
40

48

46

42
43

44


49

Ⅳ．第 24 次調査の記録

１．調査の概要

麦野Ａ遺跡第 24 次調査区は、福岡市麦野三丁目 11 番 59 に所在する発掘調査面積 155.4 ㎡の範囲である。先行して行われていた第 23 次調査の西隣の敷地であり（本書６頁第２図参照）、第 23 次調査の原因となった共同住宅建設に引き続き、23 次と同一の土地所有者が農業用倉庫を建設することになり、協議の結果、国庫補助金の適用により発掘調査を実施することになったものである。本調査は平成 27 年（2015 年）２月 25 日より開始し、同年３月 27 日に終了した。本調査開始時は、東隣の 23 次調査がまだ行われており同時併行の作業になったため、当初は表土掘削の廃土置場に若干の苦慮が生じることもあったが、23 次調査の終了（３月６日）後は廃土置場に余裕が生じ、問題なく発掘調査を進行することができた。調査地点は、麦野Ａ遺跡の立地する略南北に延びる段丘尾根からやや東に下る地点にあるが、現在は広い平坦地になっている。周囲は畑地ないし宅地である。調査区の周囲標高は、およそ 15.0 m前後で一定している。発掘調査では、調査区中央から南側では地表下－45 cm ～ 55 cm、また北側では－60 ～ 70 cm 前後で地山の鳥栖ローム上面となり、遺構を検出した。ただし第 16 図の調査区北壁土層断面図に見るように、中世後半期以降の溝状遺構などは地山ローム面よりも上から掘り込んでいる部分が遺存していることがあり、今後の周辺の調査では注意を要する。

検出遺構には、溝状遺構、大型竪穴（土坑）状遺構、凹み（落ち込み）状遺構（池？）、土坑、足元掘込土壙墓状遺構、柱穴、掘立柱建物である（第 15 図）。遺物の出土は総量でパンケース３箱分が出土した。飛鳥時代から中世末期（戦国時代）および近世初期までの土師器、須恵器、黒色土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦質土器、瓦などが出土した。検出遺構のほとんどは中世（～近世初期）の遺構であり、土色・土質からも確実な飛鳥～奈良時代の遺構はほとんどないと考えられる。「足元掘込土壙墓状遺構」としたものは、覆土の土色・土質から古墳時代以前、おそらくは弥生時代の可能性があるものだが、遺物が伴わず確証がない。いずれにしても飛鳥～奈良時代の須恵器・土師器は比較的多く含むが、ほとんどが混入品である。しかし当地にその時期の遺構が分布していたわずかな証拠になりうる。ただし確実な弥生土器の出土は無かった。

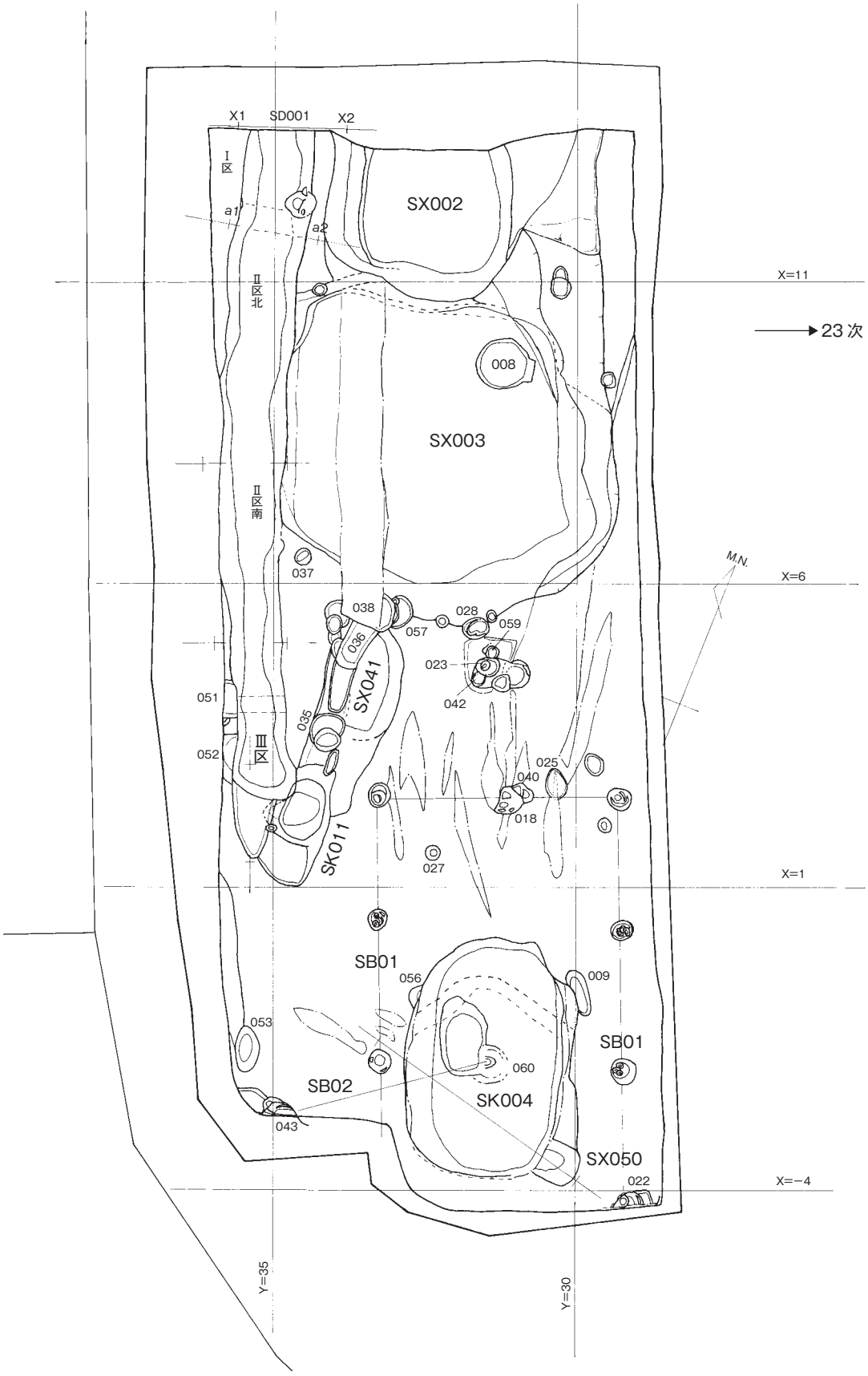
２．遺構と遺物

以下、遺構と遺物の報告を行うが、主な遺構順に報告し、遺構種別順になっていない。遺構略号として、SD は溝、SK は土坑、SP は柱穴などピット（樹木痕跡など自然遺構を含む可能性がある）、SB は掘立柱建物である。SX は性格不明遺構だが、調査中「SX」とした一部を整理過程で「SK」などに変更している。また「SK」も、実際は柱穴である可能性もある。遺構の主軸（長軸）方位に関しては磁北との関係を記す。国土座標北との関係は本書６頁第２図を参照されたい。

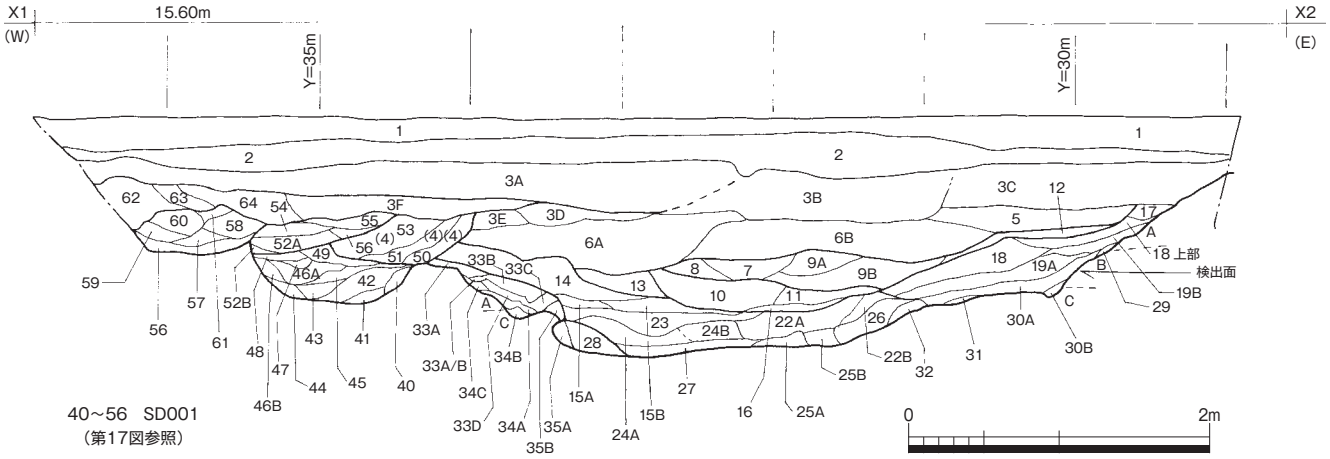
１）検出遺構

・SD001（平面図は第 15 図参照、土層断面図は第 17 図、PL. ２-１、PL. ３-５・６）

調査区西縁を略南北に走行する溝状遺構。12 m長以上で調査区北外側に続き、南側では浅く細くなって消滅する。南側のこの状態は削平のためであり、本来は南へもさらに延びていた可能性が高い。方位はＮ（磁北）－20°-Ｅ。溝幅は残りの良いところで 1.2 m前後だが、第 17 図に見るように本来の上面では 1.5 m前後はあったようである。検出面からの深さも残りの良い北側で 30 ～ 40 cm だが、本来は調査区北壁土層（第 17 図）から 65 cm 前後である。溝底面は北側端が深く標高 13.75 m、南端の溝が消える部分で 14.4 m前後である。出土遺物は比較的少なく（第 25 図１～ 10）、遺構の時期は上層が明代の青花や白磁から 16 世紀後半、掘削時期は定かではないが中世後半期だろう。中世の凹み（落ち込み）状遺構の SX002・003 を切ることからも矛盾はない。なおこの溝は周囲で確認され



第15図　麦野A 24次調査全体図（S = 1/100）



調査区北壁土層（SD001、SX002 ほか）

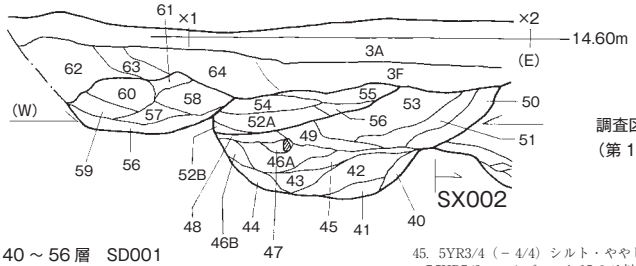
1．バラス（オリーブ青灰色）＋ガレキ少
2．粗いマサ土、粗砂レキ＋ガレキ
3 A．5YR（～ 7.5YR）4/4 ～ 4/4 にぶい赤褐色シルト＋ローム粒子少（10 ミリ以下小粒）、焼土粒わずか、土器細片わずか、砂礫ごくわずか、しまりあり（強）
3 B． 5YR4/4（－ 7.5YR4/4）ローム粒子小塊（20 ミリ以下）少（3A 層より多）、焼土粒・土器細片・砂礫わずか、しまりあり
3 C．7.5YR4/4（褐色）シルト＋ 7.5YR5/4 － 6/4 シルト斑状 20%、しまりあり、ローム粒子小塊少、炭粒・砂礫わずか
3 D． 5 ～ 7.5YR4/4 － 4/6 シルト(3A 層より明るい)・しまりややあり＋橙色～淡橙色ローム小塊 20 ミリ以下わずか＋ローム粒子少し、焼土粒・炭粒・土器細片わずか
3 E．5YR4/4 － 4/6（にぶい赤褐－赤褐色）シルト＋橙色～明赤褐色ローム粒子 5%＋褐色シルトわずか、炭粒わずか、しまりややあり、3A 層より明るい
3 F．3A 層＋ 7.5YR4/4 － 4/3 シルト
4．SD001 上層（＝50・51・53 層）、5（－7.5）YR4/3（－ 4/4）シルト＋ローム粒子少し（橙色～明赤褐色）、しまりやや甘い、SX002 覆土より 5YR 気味
5．5YR4/3（－ 4/4）粘質シルト＋暗褐色（～褐色）土＋ 7.5YR シルトブロック斑状 10% ＋ 5YR4/6（－ 6/6）ロームブロック 30 ミリ以下 20% ＋ローム粒子（明橙－明黄褐色 10 ミリ以下）少し、しまりあり、粘性ややあり
6 A．5YR4/6 赤褐色シルト＋ 5YR6/6 シルト斑状 20% ＋（淡）橙～明黄褐色ローム小塊 20 ミリ以下 5% ＋ローム粒子 5% ＋ 7.5YR3/3 暗褐色シルト 20 ミリ以下 5%（少）、しまりやや甘い
6 B．6A 層に近い 7.5YR － 10YR ロームブロック（明黄褐～橙色）30 ミリ以下 5 ～ 10%（6A よりやや多い）ロームブロック 5YR5/6 － 6/6 40 ミリ以下 5 ～ 10% ＋暗褐色土ブロック 20 ミリ以下 2% 前後、しまりややあり～やや甘い
7．7.5YR4/3 － 4/4 シルト＋ 5YR4/6 － 5/6 ブロック 30 ミリ以下 25% ＋ 7．5YR7/6 － 8/8 ロームブロック 30 ミリ以下 5%、しまりややあり
8．7 層よりも暗褐色土が混じる層、7.5YR3/3 ～ 3/4 ＋ 7.5YR7/6 ローム粘土ブロック 25 ミリ以下 10% ＋ 5YR4/6 － 5/6 ロームブロック 30 ～ 40%
9 A．9B 層よりもロームブロック多く 7 層よりも明黄褐色土系のロームブロック、9B 層と同じ暗褐色土ブロック入るが少ない＋ 7.5YR4/4 － 4/3 混合シルト＋ローム 7.5YR8/6 ロームブロック 20 ミリ以下 5%、しまりやや甘い
9 B．9A 層よりロームブロック少（10%）、暗褐色土ブロックが多い、7.5YR4/4・3/3 シルトブロック混合 20%。しまりやや甘い
10．5YR ～ 7.5YR3/4（＋ 7.5YR3/3 ブロック 15%）粘質シルト＋ 5YR4/6 ロームブロックミリ以下 25%、しまりややあり
11．5YR4/6 － 5/6 ローム主体＋ 5YR － 7.5YR3/3 － 2/4 シルトブロック 25%、しまりあり
12．7.5YR4/4 シルト＋ 5 － 7．5YR6/4（＋ 4/6）ロームブロック混合 30%、しまりあり
13．7.5YR3/3 シルトブロック＋ 5YR4/4 － 4/6 ロームブロック（40 ミリ以下）50% ＋ 7．5YR7/6 ロームブロック 30 ミリ以下 5%、しまりやや甘い
14．7.5YR（2/3 －）3/3 粘質シルト＋ 5 － 7.5YR4/4（－ 4/6）ロームブロック 60 ミリ以下 30% ＋ 7．5YR6/6 － 7/6 ローム粘質ブロック 60 ミリ以下 5%
15 A．7.5YR3/3 シルトブロック多＋ 5YR4/6 － 5/6 ロームブロック 25% ＋ 5YR6/6 － 7．5YR7/6 ロームブロック 10%（100 × 40 ミリ大あり）
15 B．5YR ～ 7.5YR4/4 ローム（汚いローム土）＋ 7.5YR2/3 極暗褐色シルトブロック（45 ミリ以下）3% ＋ 7.5YR3/3 － 3/4 シルトブロック 20%、しまりあり
16．7.5YR3/3 － 4/4 シルト 30% ＋ 5YR － 7.5YR4/6 ロームブロック 40 ミリ以下 30% ＋ 7．5 － 10YR7/6 ロームブロック 30 ミリ以下 5%、しまりやや甘い～甘い
17．7.5YR3/3 シルト＋ 7.5YR4/4 － 4/6 シルト＋ 5YR5/6 ロームブロック 25 ミリ以下 20%、しまりあり、砂粒含む
18．7.5YR3/4 シルト＋ 7.5YR4/4 － 4/ シルト 25% ＋ 7．5YR7/6 － 8/6 ロームブロック 30 ミリ以下 7 ～ 10% ＋ 5YR5/6 ローム 30 ミリ以下 3%、炭粒 1% 以下、18 層上部に土器片および白色砂礫含むローム混入 5 － 7% の薄い間層あり、しまりあり固い
19．7.5YR4/4 シルト＋ 7.5YR7/6 － 7/8 ロームブロック 10 ～ 15%、炭粒あり、しまりややあり、19 層上部に土器片含むローム混入 7 ～ 10% の薄い間層あり（18 層上部と同じ）
20・21．（欠番）
22 A．7.5YR（－ 10YR）5/6 － 6/6 ローム土主体（カサカサする）＋ 5 － 7.5YR4/6 ロームブロック 50 ミリ以下 20 % ＋ 7.5YR3/4 暗褐色シルトないし 7.5YR4/2 － 4/3 褐色シルトブロック 15 %、しまりややあり、粘性ややあり
22 B．22A 層に地山 A ロームブロック大混入、暗褐色～褐色シルト混入 7% 前後、しまりややあり、粘性ややあり
23．7.5YR4/6 － 5/6 ロームシルト（汚れたローム土）＋ 7.5（－ 10）YR6/8 － 6/6・7/6 ローム粘質ブロック 60 ミリ以下 25% ＋ 7.5YR4/4 シルト 10%、しまりややあり～やや甘い
24 A．5YR － 7.5YR4/4 － 4/6 シルト（汚れたローム土）＋ 7．5YR7/6 － 10YR8/7 ロームブロック 30 ミリ以下 15%、しまりやや甘い
24 B．7.5YR4/4・3/4・6/4 シルト混合土 25% ＋ 5YR5/6（－ 4/6）ロームブロック 75%、しまりややあり、粘性ややあり
25 A．7.5YR4/3 － 4/4 粘質シルト（一部泥質土）＋ 7.5YR6/8 － 6/6 ロームブロック 20 ミリ以下 3% ＋ 5YR5/6 ロームブロック 25 ミリ以下 5 － 7%、しまり甘い～やや甘い、粘性あり
25 B．7.5YR5/8 － 6/8 ロームブロック大主体＋ 7.5YR4/3 － 4/4 シルト 20%
26．7.5YR4/3・4/4 － 4/6 やや粘質シルト混合土（粘質土）＋ 7.5YR6/6 － 6/5 ローム 15 ミリ以下 5% ＋ 5YR5/6 ローム 10 ミリ以下 2 ～ 3%、しまりやや甘い～ややあり＋
27．7.5YR3/4（・3/3 － 4/4）シルトやや粘質シルト（泥質土含む）＋シルト＋ 7.5YR4/3 シルト 10 ～ 15% ＋ 5YR ～ 7.5YR5/6 ロームブロック 10%、しまりやや甘い、26・27 層の泥質土化は一時湛水か
28．7.5YR4/4（～ 4/6）シルト（汚れたローム土）＋ 7.5YR3/4 シルト 5% ＋ 5YR6/6 － 5/6 ロームブロック 25 ミリ以下 10%、しまりやや甘い
29．地山 B 層崩落土＋ 7.5YR4/6 ～ 5/6 シルト（30 層からの汚れ）、しまりややあり
30．7.5YR（4/3 －）4/4 シルト＋ 7.5YR4/6 汚れたローム 30% ＋ 7.5YR7/8 － 8/6 ロームブロック 30 ミリ以下 15%、しまりやや甘い
30．7.5YR4/6 － 4/4 シルト＋ 7.5YR7/6 ローム 20 ミリ以下 20%
31．7.5YR4/6（－ 4/4）汚れたローム土＋ 7.5YR6/8（－ 7/6）ロームブロック 50 ミリ以下 20%、しまりやや甘い
32．7.5YR4/4 シルト＋ 75YR5/8・6/6・7/8 ロームブロック 30 ミリ以下 30%、しまりやや甘い
33 A．7.5YR4/8 ＋ 7.5YR5/6 － 5/8 汚れたローム土（地山ローム崩落土シルト化）、しまりやや甘い
33 B．7.5（－ 10）YR7/6 － 8/7 ロームブロック主体＋ 7.5YR4/6 － 4/4 シルト、しまりやや甘い
33 C．5 － 7.5YR4/6 ローム崩落土シルト化＋ 33B 層と同じロームブロック 10 ミリ以下 10% ＋ 5YR5/6 ロームブロック 30%、しまりやや甘い
33 D．33C 層から 5YR4/6 ロームブロックを除いた層（7.5YR ロームブロックのみ）、地山ローム崩落土シルト化、しまり甘
34 A．10 － 7.5YR（7.5YR7/6 ＋ 10YR8/6 混合）ロームブロック粘質土主体＋ 7.5YR4/6 シルト若干、しまりやや甘い
34 C．34B 層＋ 7.5YR6/6 ロームブロック 30%、しまり甘い
34 B． 5 － 7.5YR4/6 汚れたローム崩落土、しまり甘い
35 A．（5 －）7.5YR4/4 － 4/6 汚れたローム土シルト化＋ 5YR6/6 － 8/8 ロームブロック 40 ミリ以下 24% ＋ 7.5YR7/6 － 7/8 ロームブロック 20 ミリ以下 5%、しまりやや甘い～甘い
35 B．5 － 7.5YR5/6 － 5/8 地山ローム崩落土＋ 7.5 － 10YR7/6 ロームブロック 25 ミリ 15% ＋ 7.5YR4/4 － 4/6 シルト 10% 以下、炭粒含む
36 ～ 39．（欠番）
40 ～ 56．SD001 覆土（第 17 図に土層注記あり）
57 ～ 61．検出面より上の新しい溝（近世以降か）の覆土
57．5YR4/6 ロームシルト化土主体＋ 5 － 7.5YR4/4 シルト 30% ＋ 5YR5/6 ロームブロック 30 ミリ以下 20% ＋ 5YR6/6 ロームブロック、しまりややあり
58．5YR － 7.5YR 漸移 4/4 － 3/4 土色漸移シルト＋ 5YR4/6 － 5/6 ローム粘質ブロック 30 ミリ（地のシルトと近い）20% ＋ 7.5YR7/6 － 6/6 ローム 20 ミリ以下 25%、しまりあり～ややあり、粘質土
59．5YR4/4 － 3/4 シルト（ローム崩れシルト化）＋ 7.5YR3/4 少し＋ 5YR6/6 ローム 10 ミリ以下粒子 5%、しまりやや甘～甘い
60．7.5YR4/6 － 4/4 シルト（61 層より明るい）＋ 7.5YR5/6（ローム）シルト 10% ＋ 7.5YR4/4 － 4/6 シルト 20% ＋ローム粒子 2%、砂粒含む、しまりややあり～やや甘い
61．7.5YR（－ 5YR）4/4 － 3/4 シルト＋ロームブロック・粒子 10 ミリ以下 3%、しまりややあり
62 ～ 64．造成盛土
62．7.5YR3/3 やや粘質シルト＋ 5YR6/6 ロームブロック最大 100 ミリ以下 30%、しまりややあり
63．7.5YR3/4 シルト主体＋ 7.5YR7/3 シルト＋ローム粒子 2 － 3%、焼土・砂礫含む（1% 前後）
64．7.5YR4/3 － 4/4 シルト＋ローム粒子 2%。砂礫多く含む、しまりあり
地山 A．5YR4/6 － 6/6 トスローム、しまり（やや）あり、粘性あり、自然の炭粒入る＋ 5YR7/4（にぶい橙色）粘質土の筋が貫入する
地山 B．地山 A に 5YR8/4 － 7/4 粘土の帯（筋）多く貫入する、地山 A より粘性強い
地山 C．5YR5/6 － 5/8 トスローム明赤褐色粘質土＋火山性粒子（スコリアないしパミス）5YR2/2 － 2/3 を含む、しまりあり

第 16 図　調査区北壁横断土層図（S = 1/50）

ている 16 世紀（戦国期）前後の城館跡の区画溝の一部で、23 次調査 SD001 とほぼ直交している。

・SX002（第 19 図、断面図の一部は第 20 図、土層図は第 16 図、PL．2－1、PL．3－7）

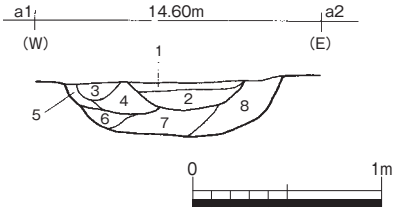
調査区北側で検出した凹み状ないし落ち込み状遺構。土坑とするには大きく、「竪穴」とするには壁の立ち上がりが急角度でない部分もあり、性格不明遺構とした。ただし土層最下層の一部に澱み状の泥質状を呈するものがあり、貯水遺構ないし「池」状の遺構であった可能性がある。やはり性格不明の凹み状遺構 SX003 を切っている。西側は上部を SD001 に切られる。東側は急角度で立ち上がっ



調査区北壁土層
（第 16 図参照）

40 ～ 56 層　SD001

40. 5YR(－7.5YR)3/4 シルト･しまりややあり +7.5YR7/6 ローム 10 ミリ以下 7%
41. 5 － 7.5YR3/4 シルト･しまりやや甘い +5YR5/6(－6)ローム 15 ミリ以下 15%
42. (5 －) 7.5YR4/4 （－ 3/4） シルト、40・41 層より明色 + 5YR6/6-5/6 ローム 5 ミリ以下 3%、しまりややあり～やや甘い
43. 5YR （－ 7.5YR） 3/4 シルト + 5YR4/6-5/6 ローム粒子・小ブロック 10 ミリ以下やや多 10 ～ 20%、しまりややあり、44 層より明色、ローム粒子多
44. 5YR3/3 シルト主 + 5YR （－ 7.5YR） 3/4 シルト 20% + 5YR4/6-5/6 ローム粒子 10%、しまりやや甘い
45. 5YR3/4 （－ 4/4） シルト・ややしまりあり・やや粘質 + 7.5YR7/6 ロームブロック 15 ミリ以下 10% + 炭粒 1%
46A. 7.5YR3/4 （－ 3/4） シルト +7.5YR3/4 （－ 3/3） シルト 15% + 7.5YR7/6-6/6 ローム 15 ミリ以下 10%、しまりやあり、46A･B は漸移
46B. 46 層に 44 層まじりの特徴､(5YR －) 7.5YR3/5 － 7.5YR シルト 30% + 5YR6/6 ローム 20 ミリ以下 20%。しまりやや甘い～ややあり
47. 黒色気味､5 － 7.5YR3/3 (－ 2/3) シルト + 7.5YR3/4 + (－ 2/3) シルト + 7.5YR3/4 シルト 20% + 5YR5/6 ローム粒子 3%、しまり甘い、土師器甕把手あり
48. 7.5YR4/6 ローム崩れ + 7.5YR3/4 － 3/3 シルト 10% + 5YR4/6 － 5/6 ローム 20 ミリ以下 20%、しまり甘い
49. 7.5YR4/6-4/4 シルト + 7.5YR5/6 － 6/6 ロームブロック 60 ミリ以下 + 7.5YR7/6 － 10YR8/6 ロームブロック 50 ミリ以下 20 － 25%（ロームブロック計 40%）、しまりややあり、粘性あり 50. 5YR （－ 7.5YR） 4/4 （－ 4/6） シルト・しまりあり + ローム粒子 2 － 3% + 砂粒 1% 以下
51. 5YR － 7.5YR4/4 シルト・しまりややあり～あり +（50 層よりロームブロック多い）7.5YR6/6 － 7/6 ローム 20 ミリ以下 10-15% + 5YR5/6 ローム 10 ミリ以下 5%
52A. (5 －) 7.5YR4/4 － 4/6 ローム（汚れあり） + 7.5YR3/3 － 2/3 シルトブロック（極暗褐色）70 ミリ以下 20% + 泥質土 + 5YR ローム 40 ミリ以下 20%、しまりやや甘い
52B. 黒色気味暗褐色土～褐色土主体、(5 －) 7.5YR3/3 － 2/3 シルトブロック + 7.5YR （－ 5YR） 4/4 － 3/4 シルトブロック多 + 5YR4/6-5/6 ローム 20%、しまりややあり
52C. 7.5YR-5YR3/4 主体（5YR3/3 のみ） + ロームブロック多い 50%
53. ロームブロック 7.5YR4/4 （－ 5YR4/4） 7.5YR4/610% + 7.5YR3/4　10% + 5YR6/6 ロームブロック 25 ミリ以下 5 － 7%+7.5YR7/6 ブロック 15 ミリ以下 3%、炭粒あり、砂粒含む
54. 黒色気味 5 － 7.5YR3/3 （－ 2/3 少） シルト + 5YR4/6 － 5/6 ロームブロック 30 ミリ以下 10-15%、しまりやや甘い
55. 7.5YR4/4(+4/3-4/6) シルト･しまりあり + 5YR4/6-5/6 ローム + 5YR5/6 ローム 10 ミリ以下 3%
56. 7.5YR3/4 シルト・粘性少・しまり（ややあり）- やや甘い + 5YR4/4 シルト若干 + 5YR4/6 － 5/6 ロームブロック 10 ミリ以下 3%

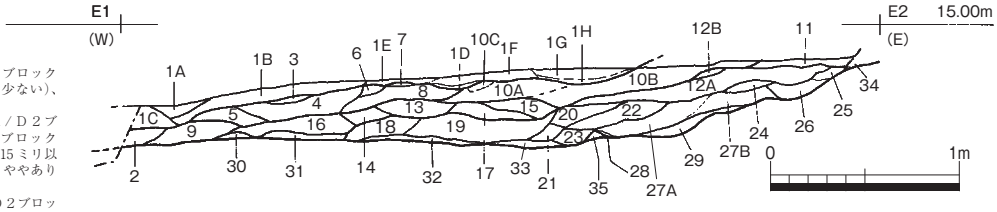


SD001-Ⅱ区北ベルト土層

1. 7.5YR3/4 ＜ 4/4 シルト + 7.5YR3/3 シルト 20 ミリ以下 10% + 5YR （－ 7.5YR） 6/6 （－ 7/6） ローム 20 ミリ以下 20%、しまりややあり
2. 5YR5/6 主体～ 5 YR6/6 ローム + 7.5YR3/4 － 4/4 シルトブロック 30㎜以下 10%、しまりあり～ややあり
3. 7.5YR － 5YR4/4 シルト + 5 － 7.5YR7/6 ロームブロック 30㎜以下 30 － 20% + 5YR5/6-6/6 ロームブロック 20㎜以下 10 － 15%、しまりややあり
4. 7.5YR3/4 シルト + 7.5YR3/3 シルト 10% + 7.5YR4/4 シルト 10% + 黒色有機質土粒 5 ミリ以下 1% + 7.5YR7/6 － 8/6 ロームブロック 25 ミリ以下 5% + 5YR5/6 同 20 ミリ以下 20%、しまりやや甘い
5. 7.5YR3/3 シルト + 5YR5/6 ローム 20 ミリ以下 15%、しまり甘い
6. 7.5YR3/4 シルト + 7.5YR3/3 シルト 10% + 4/4 シルト 20% + 5YR4/6-5/6 ロームブロック・粒子 10 ミリ以下 30%、しまり甘い
7. 7.5YR4/3 （－ 4/4） シルトやや粘質（7.5YR3/4 主体 +7.5YR4/4 シルト 20%） + 5YR5/6 ローム小ブロック粒子 15%-20%、炭粒・木炭（木質）含む、しまりややあり
8. 7.5YR4/4 (－ 4/6) シルト + 5YR (5/6 －) 6/6 ロームブロック 20 ミリ以下 1%、しまりややあり～やや甘い

第 17 図　SD001 土層図（S = 1/40）

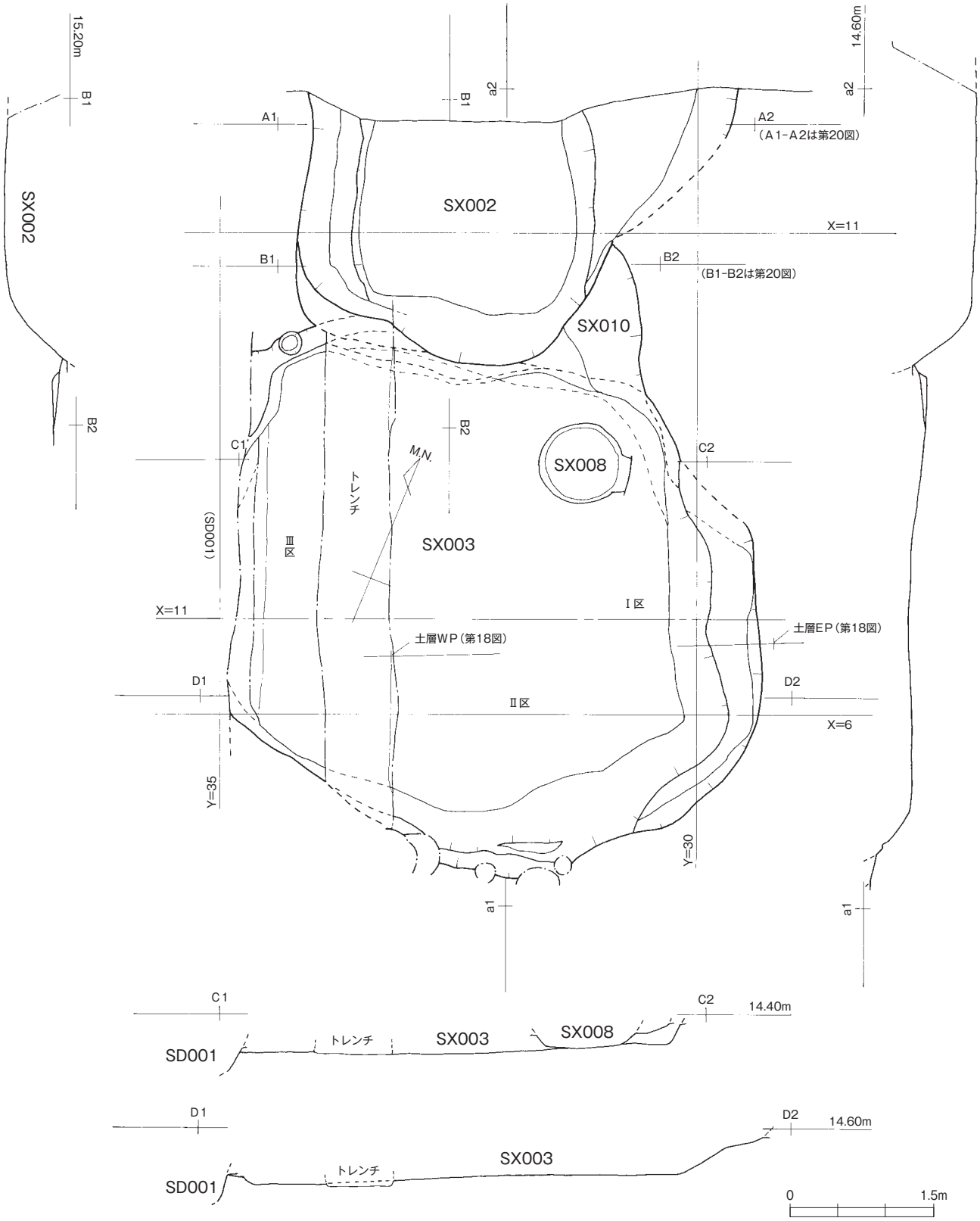
（土層断面の位置は第 19 図）
SX003 東西土層注記



1 A. 7.5YR4/4 － 4/6 シルト + D 2 ブロック 15 ミリ以下 5 － 7%（1B 層より少ない）、しまりあり、粘性わずか
1 B. 7.5YR4/4 － 4/6 シルト + D 1 / D 2 ブロック 40 ミリ以下 15% + C 2 ブロック 35 ミリ以下 5% + シルト F 粒子 15 ミリ以下 1 － 2%、炭粒わずか、しまりややあり～ややあり
1 C. 7.5YR4/4 （－ 4/6） シルト + D 2 ブロック 20 ミリ以下 7 － 10% + シルト F 粒子 10 ミリ以下 2 － 3%、しまりやや甘い、粘性に欠ける
1 D. 7.5YR （4/4） 3/4 + C ブロック 7.5 ミリ以下 3%、しまりあり
1 E. 1C 層とほぼ同じ + D 3 ブロック 25 ミリ以下 15 － 20%、しまりあり
1 F. 1B 層と類似、D 1 / D 2 ブロック 15 － 20% + E ブロック 15 ミリ以下 3%、しまりあり、粘性ややあり
1 G. 7.5YR3/4 － 4/4 シルト + D 3 ブロック 50 × 40 ミリ以下 20 － 25% + 炭粒含む黒色有機シルト F 粒子 8 ミリ以下 1%、しまりあり
1 H. 1G 層下部の 1D 層とほぼ同じ、混入物少ない、しまりあり
2. 7.5YR4/6 （－ 4/4） シルト主体 + 7.5YR4/3 シルト混在 20% + C ブロック 25 ミリ以下 25%、しまりややあり、粘性少し
3. 7.5YR4/6 シルト + D 2 粒子 5 ミリ以下 2%、しまりあり、粘性少し、混入物少ない
4. 7.5YR4/4 － 4/6 シルト + D 2 （/ D 1） ブロック 30 ミリ以下 20% + C 2 ブロック 50 ミリ大前後 2%・50 ミリ以下 1%、しまりあり （～ややあり）、粘性少し
5. 7.5YR4/6 シルト + B / C 2 ブロック 50 ミリ以下 5% + D ブロック 5 ミリ以下 2 － 3% +） E ブロック 10 ミリ以下 1%、しまりあり （～ややあり）、粘性若干
6. 7.5YR （－ 5YR） 3/4 （－ 4/4） シルト + B / C 2 ブロック 15 ミリ以下 3 － 5%、しまりやや甘い （～ややあり）
7. 5YR4/4 ローム土シルト化 40% + 5YR5/6 ローム土シルト化）60% + シルト F 粒子 5 ミリ 2%
8. 7.5YR4/4 （－ 3/4） シルト （やや粘質） + B ブロック 30 ミリ以下 7% + C ブロック 40 ミリ以下 5% + F ブロック 25 ミリ以下 3%、しまりあり
9. ローム C 2 ブロック + ローム B ブロック 30% + 5 － 7.5YR4/4 A ブロック 10%、しまりあり、粘性ややあり
10A. 7.5YR3/4 （－ 4/4） シルト + B （/ C 2） ブロック 10 ミリ以下 7% + G (/ H) ブロック 10 ミリ以下 1 － 2% + 有機物・炭粒含むシルト F （黒色）粒子 3 ミリ以下わずか、白色砂礫 2.5 ミリ以下 1%、しまりあり
10B. 7.5YR4/4 － 3/4 シルト + F （/ G） シルト 10% + 白色砂礫 2.5 ミリ以下 1 － 2% + ローム B ブロック 25 ミリ以下 7% + D 3 ブロック （～灰白色） 30 ミリ以下 2%、しまりあり
10C. 7.5YR4/4 （－ 3/4） シルト + B / C 2 ブロック多 30%、しまりややあり
11. 7.5YR3/4 － 4/4 シルト + ローム （B /） C 2 ブロック 25 ミリ以下 10% + 炭・有機物含むシルト F ブロック・粒子 20 ミリ以下 1 － 2%、しまりあり、粘性少～ややあり
12A. 7.5YR4/6 ローム土粘質シルト化（B ブロックに C 2 ロームの汚れ） + 7.5YR3/4 （－ 3/3） シルトブロック斑状 15 － 20% + B ブロック 20 ミリ以下 5% + D 3 ブロック 10 ミリ以下 1% + + 白色砂礫 2%、しまりありかたい
12B. 7.5YR4/6 － 4/4、しまりありかたい
13. 7.5YR (3/3 －) 3/4 シルト + ローム B ブロック 25 ミリ以下 7 － 10% + C 2 ブロック 10 ミリ以下 3% + 炭粒多いシルト F 粒子 3 ミリ以下 1% + D 3 ブロック （－灰白） 7 ミリ以下 1%、しまりあり、粘性ややあり
14. 7.5YR3/4 シルト + C 2 ブロック 35 ミリ以下 10 － 15% + B ブロック 20 ミリ以下 5% + G / H 5 ミリ以下 1%、しまりややあり
15. 7.5YR （－ 5YR） 4/6 ローム B ブロックシルト化 (汚れたローム土)50% + 7.5YR3/4 (－ 3/3･4/3) シルトブロック 30% + B / C ブロック 30 ミリ以下 10% + シルト F ブロック 20 ミリ以下 2%、しまりあり、粘性ややあり
16. 7.5YR3/4 （－ 4/4） シルト + B ブロック 30 ミリ以下 20% + C 2 ブロック 20 ミリ以下 5% + シルト F （～ G / H） 粒子 5 ミリ以下 2%、しまりやや甘い、粘性ややあり
17. 7.5YR3/3 － 3/4 シルト + ローム B / C 粒子 8 ミリ以下 5% + シルト F 粒子 5 ミリ以下 1%、しまりあり、粘性ややあり
18. 16 層に近いがロームブロック多い、B / C 2 ブロック （大～小） 70% + 7.5YR4/3 － 4/4 シルトブロック 20 － 25%、しまりやや甘い、粘性ややあり
19. ローム C 2 ブロック （大～小） 50% + 7.5YR3/3 （－ 3/4） シルトブロック 30% + + B ブロック （大小） 15 － 20% + シルト F ブロック （15 ミリ以下） 3%、しまりあり～ややあり
20. 7.5YR3/4 （－ 2/3） シルト （やや粘質） + ローム B ブロック 30 ミリ以下 10% + C 2 ブロック 30 ミリ以下 5 － 7% + ローム E 粒子 7 ミリ以下 2% + シルト F （有機質土） 粒子 2 ミリ以下 1%、焼土粒 1%、白色砂礫 1%、しまりあり （～ややあり）、粘性ややあり
21. 20 層とほぼ同じ、ただししまり・粘性は 20 層に劣る（しまりややあり～やや甘い）、ローム B ブロック 30 ミリ以下 25% + シルト （F /） G 粒子 5 ミリ以下 2%
22. 7.5YR4/3 (－ 3/4) シルト + ローム B ブロック 30 ミリ以下 5 － 7% + E ブロック 20 ミリ以下 1% + シルト F 粒子 （有機質土粒含む） 3 ミリ以下 1% 以下、白色砂礫 1%、土器片 1%、しまりあり、粘性あり （～ややあり）
23. 7.5YR4/3 (－ 4/4) シルト + ローム B ブロック 10 ミリ以下 5%、しまりややあり　粘性少し
24. 7.5YR4/3 － 4/4 シルト + ローム C 2 粒子 3 ミリ以下 2%、炭粒わずか、しまりありかたい
25. 7.5YR4/4 （－ 3/4） シルト （やや粘質） + B （/ C 2） ブロック 15 ミリ以下 7 － 10%、赤褐色焼土粒 1%、しまり （やや） あり
26. 7.5YR3/4 (－ 3/4) シルト + ローム B ブロック 30 ミリ以下 15% + C 2 ブロック 30 ミリ以下 10% + D 3 または E 粒子 5 ミリ以下 1% + シルト F （有機質土） 粒子 5 ミリ以下 1% 未満、しまりあり～ややあり、粘性ややあり
27A. 7.5YR3/4 シルト （やや粘質） + B ブロック 30 ミリ以下 10% + C 2 ブロック 20 ミリ以下 3 － 5% + A ブロック 20 ミリ以下 2 － 3% + ローム E 粒子 5 ミリ以下 1%、白色砂礫 1% 以下、炭粒含むシルト F 粒子 5 ミリ以下わずか、しまりあり
27B. 27A 層よりロームブロック多い（全体で 30% 強）、7.5YR3/4 － 4/4 シルト + C 2 ブロック 30 ミリ以下 20 － 25% + ローム B ブロック 25 ミリ以下 10%、炭粒わずか、しまりあり、粘性ややあり
28. 7.5YR3/4 シルト、しまりあり、粘性あり
29. 7.5YR4/4 － 3/4 シルト + C 2 ブロック 20 ミリ以下 10% + B ブロック 15 ミリ以下 5%、粘性 （やや） あり、しまりあり
30. 5 － 7.5YR3/4 － 4/4 ローム土シルト化 (ローム地山風化し汚れる) + 5YR4/6 (－ 5/6) ローム B / C 2 ブロック 20% + 7.5YR3/3 シルト斑状 10%、しまりややあり （～やや甘い）、粘性ややあり
31. （A /） B ローム土 50 － 60% + ローム C 2 ブロック 30 － 40% + H ブロック 3% + シルト F （炭粒・有機質土）粒子少し、しまりややあり～やや甘い、粘性ややあり
32. 7.5YR3/4 (－ 3/3) シルト + ローム C 2 （/ B） ブロック 25 ミリ以下 25%、しまりやや甘い、粘性ややあり
33. 7.5YR3/3 － 4/3 シルト + ローム （B /） C 2 ブロック 15 ミリ以下 5%、しまりややあり （～やや甘い）
34. 25 層の外側上部（別遺構の覆土？）、5 － 7.5YR 粘質シルト + 7.5YR4/3 － 3/4 シルト 20%、直下のローム地山よりは濁って汚れている、しまりあり （ややかたい）
35. 5YR5/6 （－ 4/6･4/8） ローム C 2 / B 1・B 2 / A 地山ブロックの下部に 7.5YR4/3 （－ 4/4） シルトが入る（この境界で床面の覆土がはがれる）、しまりややあり、粘性あり、下部の地山よりはしまりやや甘い（ローム地山ブロック = A － E、他のシルトブロック）

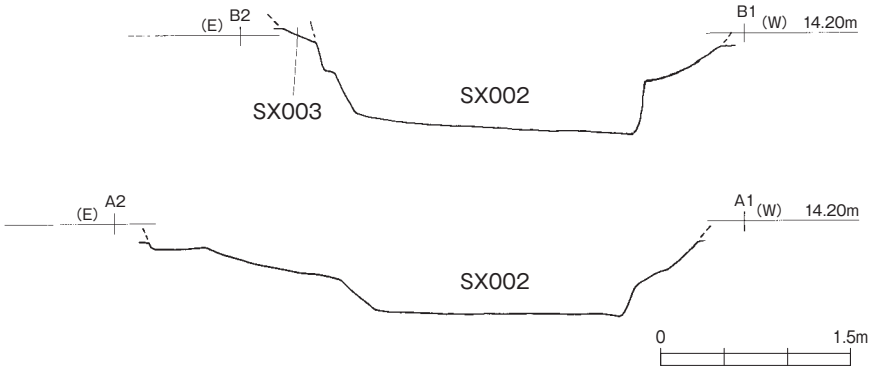
A. 5YR4/3 （－ 4/4）
B 1. 5YR4/4 － 4/6　　B 2. 5YR4/8
C. 5YR5/4 － 5/6 （・6/6）
C 1. 5YR5/4 － 5/6　　C 2. 5YR5/6 － 6/6
D 1. 7.5YR6/6 － 6/8
D 2. 7.5 （－ 10） YR7/6 － 7/8
D 3. 7.5 － 10YR7/6 － 8/6 （～灰白色）
E. 灰白色～浅黄橙色八女粘土（芯がかたい黒色を呈する筋状の場合あり）
F. 5 － 7.5YR2/2 － 2/3 （有機質土・炭粒含む場合多い）
G. 7.5YR2/2 － 3/3 （暗褐～極暗褐色）
H. 7.5 （－ 10） YR4/3 （－ 3/3･3/4）

第 18 図　SX003 東西土層図（S = 1/40）



第19図　SX002・003平面図・断面図（S = 1/60）

た後に上部がなだらかになっている。平面は深い部分が隅丸方形状で東西3.1 m×南北 3 m以上で北側に続き、東側上部が三角形状に広がりこれを含めると東西4.5 m以上となる。深さは検出面から60 ～ 70 cmだが、北側土層の6Ａ・6Ｂ層をこの遺構上部の凹みへの堆積とすれば約90 cmとなる。底面は比較的平坦で、標高13.4 ～ 13.5 m前後である。ただし西側壁際と北側がやや深く、西側壁下



第 20 図　SX002 断面図（S = 1/60）※第 19 図参照

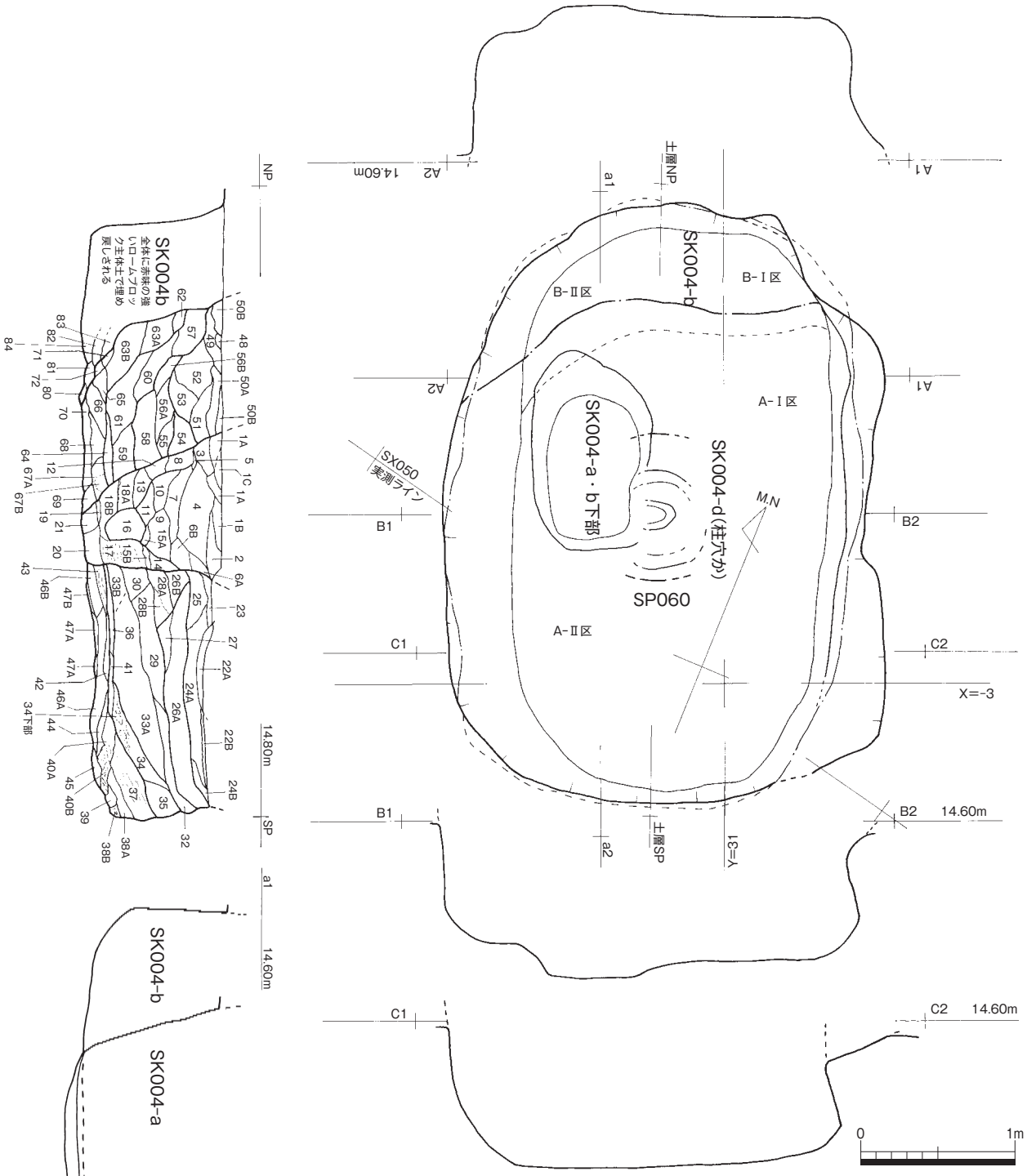
部が外側にえぐれているところがある。滞水の結果かもしれない。なお北側土層（第 16 図）の 33・34 層群の凹みは、SX002 とは別の遺構の可能性がある。出土遺物は非常に少なく、図化できたのは古代の須恵器片（第 25 図 11）ぐらいであり、遺構の時期ははっきりしない。

・SX003（第 19 図、土層断面図は第 18 図、PL.　2－1、PL.　3－8、PL.　4－1）

調査区中央北側で検出した凹み状遺構。西側を SD001 に、北側を SX002 に切られる。平面形は不整方形ないし不整六角形状（？）を呈する。東西 5.0 ～ 5.3 m以上×南北約 6 m、検出面からの深さは 40 ～ 55 cm で東西は西側が、南北は北側がやや深い。東側の立ち上がりは他より緩やかである。東側から北側にかけては重複するがほぼ同じプランの古い遺構が外側にあり（SX010）、それがある程度埋まった後にほぼ同じ箇所を掘り直したものと観察した。SX010 は SX003 よりも北側と東側に広がり、東側壁の立ち上がりが SX003 よりも急である。底面はほぼ同じ深さである土層を観察すると（第 18 図）、SX003 はロームブロックを多く含む層で占められ、かつ各層の傾きが一定しておらず、自然堆積というよりは、下層以外は埋め戻し的な行為で埋没した可能性がある。遺構の性格は不明で、SX002 で認められたような下層における澱み状の堆積が認められず、「池」状の形状をしているが判断しかねる。また SX003 埋没後に上部から径 100 cm 前後の円形ピット状遺構（SX008）が掘られるが、柱穴としては単独であるため性格不明遺構とした。出土遺物は比較的多く、図化できたものも多い（第 25 図 12 ～ 32）。中には飛鳥時代後半・奈良時代～平安時代前期の須恵器や土師器も認められるが、上層～中層出土には 14 ～ 16 世紀の青磁・白磁・土師器小坏があり、下層には 13 ～ 14 世紀頃の土師器坏等がある。SX010 からの出土遺物には（第 25 図 33・34）、13 世紀と思われる瀬戸焼の卸皿がある。したがって遺構の掘削時期は SX010 が 13 世紀、SX003 が 14 世紀で、凹みの一定維持期間を経て、15 ～ 16 世紀のある時期に一気に埋められたものと考える。

・SK004（第 21 図、土層注記は表 1、PL.　2－3、PL.　3－1 ～ 4）

調査区南側で検出した不整長方形ないし小判形（楕円形）の竪穴状土坑。当初性格不明遺構（SX）としていたが、類例から竪穴状の土坑で穴蔵（貯蔵穴）の可能性を考える。検出時の平面把握と土層の検討から、当初南北に長い小判形の土坑があり（SX004-b）、それが一度埋まった後に不整長方形の新たな土坑（SX004-a）が掘り直しされたものと判断した。004A と 004B の覆土の違いは明瞭である。調査時はさらに 004-a の中にもう一基の重複（004-c）を考えたが、後に認識を改めた。さらに平面では当初全く不明であったが、南北の土層ベルトを残して掘削しベルト両側の土層を検討する過程で「SX004-d」が上部から掘りこまれていることを確認した。ただしこれは大型の柱穴（SP060 とする）で土坑ではない。竪穴状土坑の規模、東西は 2.7 ～ 2.8 m幅、南北長は 004-a が 3.9 m、004-b が 3.3 mである。深さは、土坑北半がやや深く検出面から 80 ～ 90 cm、南半は凹凸あるがやや浅く 70 ～ 80 cm で、また底面中央北東部が一段低く凹み、検出面から 100 cm 前後の深さとなる。土坑の壁であるが、東辺から南辺は下部が外側に若干オーバーハングする。東辺上部は直立ないし内傾する壁の上部がなだらかな斜面となる。遺構の方位は、中軸が土坑上端と下端で異なるものの、N-21 ～ 24°-Wであり、SB01 の方位に近い。平面的にも SX004 は SB01 のおよそ中央にあり、



土層注記（他は次項表１参照）

1 ～ 21．SK004-d（上部からの掘りこみ、柱穴か）

1 A．7.5YR3/3 － 2/3 粘質シルト主体＋地山Ａブロック 75 ミリ以下 5% ＋地山Ｃブロック 5 ミリ以下 3% ＋Ｄブロック 15 ミリ以下 3% ＋ローム粒子やや多、しまりあり（地山ロームＡ～ＥおよびシルトＦは SK004 土層注記末尾参照）

1 B．7.5YR2/3 粘質シルト主体＋Ａブロック 20 ミリ以下 7% ＋Ｄブロック 10 ミリ以下 1% ＋Ｆブロック黒褐色シルト 15 ミリ角ごくわずか、しまりあり

1 C．1A 層とほぼ同じだがロームブロック混入やや少ない

2．7.5YR2/3（－ 3/4）粘質シルト主体＋Ｄブロック 10 ミリ以下 1% ＋Ａ / Ｂブロック 15 ミリ以下 5% ＋ローム粒子やや多、しまりあり

3．7.5YR（2/3 －）3/3 粘質シルト＋Ｂローム 3 ミリ以下粒子多＋Ｂブロック 15 ミリ以下 10% ＋Ｄブロック 15 ミリ以下 2% ＋Ｆブロック 7 ミリ以下ごくわずか、しまりあり

4．7.5YR4/3（－ 3/3）粘質シルト＋Ａ～Ｂ粒子 5 ミリ以下 15% ＋Ｂブロック 20 ミリ以下 10% ＋Ｃブロック 50 × 20 ミリ以下 3 ～ 5% ＋Ｅブロック 15 ミリ以下 1% 以下＋Ｄブロック 12 ミリ以下 1 ～ 2%、しまりややあり

5．7.5YR4/3（粘質）シルト＋Ｂ－Ｃローム粒子 5% しまりや甘い

6 A．7.5YR2/3 粘質シルト＋Ｂブロック・粒子 10 ミリ以下 7% ＋Ｄブロック 5 ミリ以下 1% ＋Ｅブロック 15 ミリ以下 2%、しまりややあり

6 B．6A 層よりしまりあり、7 層に近い特徴（6A ～ 7 層漸移的）、7.5YR3/3 粘質シルト＋Ｂブロック 20 ミリ以下 15% ＋Ｃブロック 10 ミリ以下 5% ＋Ｅブロック 5 ミリ以下わずか＋黒褐色シルトＦブロック 5 － 15 ミリ長以下 1%（炭を内包）

7．7.5YR3/3 － 4/3（粘質）シルト＋Ｂブロック・ローム粒子 5 ミリ以下 15 － 20% ＋Ｃブロック 25 ミリ以下 7 － 10% ＋Ｄブロック（Ｄ１）22 ミリ以下 2% ＋Ｆブロック 10 ミリ以下 1%（ごくわずか）、しまりやや甘い～ややあり、

8．12 に漸移的に続く層、12 より少し暗くＢブロックが多い、5 － 7.5YR4/3 － 3/3 粘質シルト＋Ｂブロック 50 ミリ以下 25%（大ブロックあり）＋Ｃブロック 20 ミリ以下 10% ＋Ｄブロック・粒子ごくわずか、しまりややあり

9．5YR － 7.5YR3/3（－ 4/3）粘質シルト＋Ｃブロック 35 ミリ以下 20 － 25% ＋Ｆブロック 5 ミリ以下 1% ＋Ａブロック（地山ローム土Ａより明るい）30 ミリ以下 10%、しまりややあり

10．5 － 7.5YR3/3（－ 4/3）暗赤褐色～暗褐色（粘質）シルト＋Ｃブロック 20 ミリ以下 10 － 15% ＋Ｂブロック 15 ミリ以下 5 － 7% ＋Ｅブロック 5 ミリ以下ごくわずか＋Ｆシルト微粒（3 ミリ以下）わずか、焼土粒 3 ミリごくわずか、しまりやや甘い（～甘い）

11．5 － 7.5YR3/3 粘質シルト＋Ｃブロック多 25 ミリ以下 25 － 30% ＋Ｆブロック 10 ミリ以下 1% ＋Ａ / Ｂブロック（地山ローム土より明るい）20 ミリ以下 7% ＋ 10 層から漸移的に続く、しまりややあり

12．5YR（3/3 －）4/3 ～ 7.5YR4/3 － 3/4 粘質シルト＋Ｃブロック 25 ミリ以下 20% ＋Ｂブロック 20 ミリ以下 10 － 15%、しまりややあり

13．7.5YR4/3（－ 3/4）粘質シルト＋Ｃブロック 30 × 40 ミリ以下（大ブロックあり）多、40% ＋Ｂブロック 20 ミリ以下 15%、しまりややあり

14．7.5YR4/3 粘質シルト＋Ｃブロック 25 ミリ以下多 30% ＋Ｄブロック 25 ミリ以下 3%、しまりあり

第 21 図　SK004 平面図・断面図・土層図（S = 1/40）

表１．SK004 土層注記（第 21 図 -15 層以下）

1～21．SK004-d（上部からの掘りこみ、柱穴か）

※ 1～14 は第 21 図内

15．7.5YR2/3 粘質シルト・しまりやや甘い＋Ｃブロック 15 ミリ以下 3% ＋Ａ（－Ｂ）ブロック 25 ミリ以下 3%、しまりあり

16．柱痕か、7.5YR3/3（－ 4/3）シルト、しまり甘い（有機物が腐朽した感じ）、Ｂブロック粒子 10 ミリ以下 5 － 7%

17．7.5YR3/3（－ 4/3）粘質シルト＋ロームブロック混入水平互層堆積（柱穴掘り方充填土か）、ロームブロックはＣブロック 20 ミリ以下 10% ＋Ｂブロック 20 × 30 ミリ以下 7% ＋Ｅブロック 25 ミリ以下わずか、しまりやや甘い

18Ａ．7.5YR2/3（粘質）シルト 40% ＋ 7.5YR3/3（－ 4/3）粘質シルト 40-50% ＋Ｂブロック 20 ミリ以下 7 － 10% ＋Ｃブロック 10 ミリ以下 3%、しまりややあり～やや甘い

18Ｂ．7.5YR3/3（－ 4/3）粘質シルト＋Ｃブロック 15 ミリ以下 5% ＋（Ａ /）Ｂブロック 20 ミリ以下 7 － 10%、しまりややあり～やや甘い

19．7.5YR2/3 シルト＋Ｃブロック 30 ミリ以下 15%、しまり甘い

20．ローム再堆積層、ロームブロックとローム土微粒子化多い、Ｃローム 70% ＋Ｂローム土 20% ＋ 7.5YR4/4 褐色シルト 5%、しまりあり、粘性あり

21．20 層とほぼ同じだがロームブロックさらに多く特にＣブロック主体、5YR4/6 Ｃブロック主体＋ 5YR5/6 － 5/8 Ｃブロック 20%、しまりあり、粘性ややあり

（22 ～ 47．SK004-a 南半土層）

22．7.5YR3/3 粘質シルト＋ 10YR3/4 － 4/3 砂質シルト混入＋土層上部に 10YR4/3 シルト多い＋Ｃブロック（赤褐色気味）10 ミリ以下 1% ＋Ｃ粒子 2 － 3%、炭粒・砂礫多く含む、しまりありかたい

23．7.5YR2/3 － 3/3 粘質シルト＋Ｃ / Ｄブロック 5 ミリ以下 3% ＋Ｅブロック 10 － 15 ミリ以下 1%、24 層よりロームブロック混入少ない、しまりありかたい

24Ａ．24 Ｂ層よりロームブロック混入多・大きい、7.5YR3/3（－ 2/3）粘質シルト＋ 5YR3/3 シルト混入 30% ＋Ｂブロック 25 ミリ以下 3% ＋Ｄブロック粒子 15 ミリ以下 5% ＋Ｃブロック粒子 10 ミリ以下 2%、炭粒 3 ミリ以下わずか、しまりあり

24Ｂ．24A 層とほぼ同じ土層（7.5YR3/3（－ 2/3）粘質シルト＋ 5YR3/3 シルト混入主体）Ｂブロック 25 ミリ以下 5%、しまりあり

25．7.5YR3/3（－ 3/4）粘質シルト＋Ｂブロック 20 ミリ以下 5% ＋Ｃブロック 10 ミリ以下 2% ＋Ｄブロック 15 ミリ以下 3%、しまりややあり（24 層よりしまり劣る）

26Ａ．7.5YR（2/3 －）3/3 粘質シルト＋ 7.5YR4/3 粘質シルト 20% ＋Ｂブロック 25 ミリ以下 5 － 7% ＋Ｃブロック 20 ミリ以下 5 － 7% ＋Ｅブロック 20 × 30 ミリ以下 1% ＋Ｄブロック 40 × 30 ミリ以下 2% ＋Ｆブロック 10 ミリ以下 1%、炭粒 8 ミリ以下 1% 以下、しまりあり

26Ｂ．Ｂブロック 15 ミリ以下 7 － 10% ＋Ｃブロック 20 ミリ以下 3 － 5%、土器小片・炭粒わずかに含む

27．7.5YR2/3（－ 3/3）粘質シルト、しまりあり

28Ａ．7.5YR3/3（－ 4/3）粘質シルト＋Ｂブロック 30 ミリ以下 15 － 20% ＋Ｃブロック 20 ミリ以下 10% ＋ 25 ミリ以下炭化物・炭粒を含むＦブロック 1 － 2%、しまりややあり

28Ｂ．Ｃブロック 50 × 80 ミリ大含む～ 20 ミリ大 50% ＋Ｆブロック・粒子 25 ミリ 7% ＋炭粒・炭化物多く含む

29．7.5YR（2/3 －）3/3 粘質シルト＋ロームブロック大多い 40% 以上（Ｃブロック 80 × 50 ミリ以下 20 － 25% ＋Ｂブロック 20 ミリ以下 10% ＋Ｅブロック 40 × 30 ミリ以下 1% ＋ 10YR － 7.5YR2/3 極暗褐色Ｇブロック 80 × 20 ミリ以下 2% ＋Ｄブロック 30 ミリ以下 2% － 3%、土器片含む、しまりややあり

30．7.5YR3/3 － 4/3 やや粘質シルト＋ロームブロックやや多（斑状）・ＣＣブロック 25 ミリ以下 15% ＋橙色土 4 ミリ以下ごくわずか、しまりやや甘い

31．7.5YR3/3（－ 2/3）粘質シルト＋Ｃローム粒子 2%、しまりあり、混入物少

32．7.5YR2/3 － 3/3 粘質シルト＋Ｃブロック 15 ミリ以下 5% ＋Ｂブロック 15 ミリ以下 2 － 3% ＋Ｅブロック 10 ミリ以下わずか、焼土粒わずか、混入物周囲より少ない、しまりややあり～やや甘い

33Ａ．29 層に近いが間に 32 層が挟まれる、ロームブロック・粒子組成が多種、5 － 7.5YR3/3（－ 4/3）粘質シルト＋Ｃブロック多・大きく 80 × 40 ミリ以下 20% ＋Ｄブロック 40 × 20 ミリ以下 3% ＋Ｂブロック 40 ミリ以下 5 － 7% ＋Ｆシルト粒 7 ミリ以下わずか、焼土粒ごくわずか、しまりややあり、粘性あり

33Ｂ．33A 層に近いがＢ / Ｃブロック 40%、しまりやや甘い

34．5YR2/3 粘質シルト＋ 5YR3/3 粘質シルト 20%、しまりややあり～やや甘い、**34 層下部**はＢブロック 5 ミリ以下 7% ＋Ｃブロック 40 ミリ以下 15% ＋Ｄブロック 5 ミリ以下 1% を含む（34 層上部から漸移的に下部でロームブロックが多くなる）

35．7.5YR3/3 － 4/3 粘質シルト＋ロームブロック 20 ミリ以下斑状 15%（Ｃブロック 20 ミリ以下 10% ＋Ｂブロック 20 ミリ以下 3 － 5% ＋Ｅブロック 20 ミリ以下 1%）、しまりややあり

36．ロームＣブロック 50 ミリ以下 30 ～ 40% ＋Ｅ（/ Ｄ）ブロック粘土 40 × 20 ミリ以下 5% ＋ 7.5YR4/3 － 3/4 粘質シルト 10 ミリ以下 5%、しまりやや甘い

37．斜めの堆積ラミナ＋ロームＣブロック斑状に分布、7.5YR3/3 － 4/3 粘質シルト＋Ｃブロック 30 ミリ以下 15 － 20% ＋Ｂブロック 15 ミリ以下 3 － 5% ＋Ｄブロック 10 ミリ以下 1% ＋炭含むシルトＦ粒子 10 ミリ以下わずか、しまりやや甘い

38Ａ．7.5YR3/3 粘質シルト＋Ｂブロック 40 ミリ以下 5% ＋Ｃブロック 50 × 20 ミリ以下 10% 前後、しまりやや甘い～甘い

38Ｂ．38A 層（7.5YR3/3 粘質シルト）＋（Ｂ /）Ｃブロック 60%（主体）、しまりやや甘い

39．5YR4/6 － 5/6 ロームＣブロック

40．39 層と同じロームＣブロック崩落土 80% ＋ 7.5YR3/3 － 4/3 シルト（やや粘質）＋ロームブロックの間に極暗－暗褐色土（しまりやや甘い）含む、ロームブロックしまりあり

41．7.5YR3/3 － 4/3 粘質シルト＋ロームＣブロック 25% 前後＋Ｅブロック浅黄～灰白色粘土 10 ミリ以下 7% ＋ロームＢブロック・粒子 20 ミリ以下 5%、全体でローム土混入 35 － 40%、しまりやや甘い

42．7.5YR3/3 － 4/3 粘質シルト＋Ｃブロック 20 ミリ以下 15 － 20% ＋Ｂブロック 7 － 10% ＋Ｅブロック 15 ミリ以下 1%、しまり甘い～やや甘い、全体でローム土混入 25 － 30%、41 層より混入少、44 層より混入多

43．水平気味にローム土・シルト堆積、（Ｂ /）Ｃローム土 80% ＋ 7.5YR3/3 シルトブロック 10% ＋ 7.5YR4/3 シルト 5 － 7%

44．7.5YR2/3 やや粘質シルト＋層下部に 7.5YR3/3 シルト混入＋ローム粒子 5 ミリ以下 2%、しまりやや甘い、よどみ状堆積

45．ロームＣブロック主体（他の混入物は少ない）

46Ａ．7.5YR（－ 5YR）3/4 － 4/4 粘質シルト 80% ＋赤褐色（5YR4/4 － 4/8）ロームＣブロック 60 ミリ以下ブロック多 40% 以上＋ 5YR5/6 － 6/6 Ｃブロック 40 ミリ以下 10% ＋Ｂブロック粒子 20 ミリ以下 15% ＋Ｆ（/ Ｇ）ブロック 40 × 50 ミリ以下 1%、しまりやや甘い（～甘い）

46Ｂ．ロームＢ（/ Ｃ）ブロック崩落土 80% 以上＋Ｃブロック大（50 ミリ）以下 7% ＋ 7.5YR3/4 暗褐色シルト 10%、しまりやや甘い

47Ａ．（5 －）7.5YR3/3（－ 4/3）粘質シルト＋ロームＣ粒子 5 ミリ以下 7%、しまり甘い、よどみ状堆積

47Ｂ．47A ＋Ｃブロック 10 ミリ以下 10 － 15%、しまり甘い）

（48 ～ 72．SK004-a 北半土層）

48．ロームＣ / Ｄブロック

49．50 層よりやや明るい、混入物（ロームブロック）大きい、7.5YR3/3 － 3/4 粘質シルト＋Ｂブロック 10 ミリ以下 5% ＋Ｃブロック 10 ミリ以下 10% ＋Ｄブロック 10 ミリ以下 2% ＋Ｅブロック 10 ミリ以下 1% ＋炭混じりシルトＦ 10 ミリ以下 1% ＋シルトＦ / Ｇブロック 30 ミリ以下 1 － 2%

50Ａ．1A 層よりも混入物少ない、23 層に近い、7.5YR2/3（－ 3/3）粘質シルト＋Ｄ（/ Ｅ）ブロック 15 ミリ以下 2% ＋Ａ / Ｂブロック 15 ミリ以下 3% ＋（Ｂ /）Ｃブロック 5 ミリ以下 5（－ 7）%、しまりあり

50Ｂ．主体土は 50A 層と同じだが 50A 層より混入物少ない、1A・1B 層に近い

51．7.5YR3/3（－ 2/3）粘質シルト＋Ｃブロック 15 ミリ以下 10% ＋Ｂブロック 10 ミリ以下 3 － 5% ＋Ｄブロック 10 ミリ以下 2 － 3% ＋シルトＦブロック 2 － 3%、しまりあり

52．7.5YR3/3（－ 2/3・3/4）粘質シルト＋Ｃブロック 35 ミリ以下 15 － 20% ＋Ｂブロック 25 ミリ以下 5YR － 7% ＋Ｄブロック 20 ミリ以下 3%、炭粒 8 ミリ以下 1%、ロームブロックやや大が多い、しまりあり

53．7.5YR2/3 － 4/3 － 3/4 粘質シルト＋Ｄブロック大 70 ミリ以下 15% ＋Ｃブロック 20 ミリ以下 3% ＋Ｂブロック 25 ミリ以下 7 － 10% ＋ロームＣ粒子 5% 以下、炭粒ごくわずか、しまりあり、62 層に似る

54．7.5YR2/3 粘質シルト＋ 7.5YR3/4 － 4/4 粘質シルト 40% 以上＋ 5YR4/4 ロームＢブロック 20 ミリ以下斑状 20% ＋Ｃブロック 20 ミリ以下 10% ＋Ｄブロック 20 ミリ以下 3% ＋Ｅブロック 15 ミリ以下 2%、ロームブロック多く含む、しまりあり～ややあり

55．7.5YR3/3 － 3/4 粘質シルト＋Ｂブロック 15 ミリ以下 5 － 7% ＋Ｃブロック 15 ミリ以下 3 － 5% ＋Ｆ / Ｇシルトブロック 20 ミリ以下 1%、しまりややあり

56Ａ．7.5YR（3/3 －）3/4 粘質シルト＋ロームＣブロック 20 × 40 ミリ以下 15 － 20% ＋Ｂブロック 25 ミリ以下 10% ＋ロームＤブロック 10 ミリ以下 2 － 3%、しまりややあり～やや甘い

56Ｂ．56A 層＋ロームＣブロック 50%

57．7.5YR3/4 － 3/3 粘質シルト＋ロームＣブロック・粒子 15 ミリ以下 10 － 15% ＋ロームＢブロック 10 ミリ以下 2 － 3% ＋Ｄ / Ｅブロック 5 ミリ以下わずか、56 層よりロームブロック少、しまりややあり～やや甘い

58．7.5YR3/3（－ 3/4）粘質シルト＋Ｆ / Ｇシルトブロック 25 ミリ以下 2% ＋ロームＣブロック 30 × 40 ミリ以下 20% ＋ロームＢブロック 20 ミリ以下 5 － 7%、しまりやや甘い～ややあり

59．58 層に近い、ロームブロック 58 層より多い、7.5YR4/3 － 3/3 粘質シルト＋ロームＣブロック 30 ミリ以下 20 － 30% ＋ロームＢブロック 20 ミリ以下 10% ＋Ｆ / Ｇシルトブロック 35 ミリ以下 5% ＋黒色土Ｇ（炭含む）10 ミリ以下 1%、粘性あり、しまりやや甘い～ややあり

60．7.5YR4/3 － 3/4（・3/3）粘質シルト＋ロームＣブロック・粒子 20 ミリ以下 15 － 20% ＋Ｂブロック 10 ミリ以下 5% ＋（Ｄ /）Ｅブロック 15 ミリ以下 2%、しまりやや甘い

61．7.5YR3/3（－ 4/3・3/4）粘質シルト＋ロームＣブロック・粒子 40 ミリ以下 10 － 15% ＋Ｆ / Ｇシルトブロック 3% ＋ロームＢブロック 35 ミリ以下 7 － 10%、粘性わずか、しまりやや甘い、60 層より混入ブロック大きい

62．53 層に似る、7.5YR（4/3 －）3/4 ＋ロームＤブロック 40 ミリ以下 15% ＋Ｂブロック 25 ミリ以下 15% ＋Ｃブロック 25 ミリ以下 15%、しまりあり～ややあり、粘性あり

63Ａ．7.5YR4/3 － 3/4 粘質シルト＋ 7.5YR2/3 粘質シルト少＋）Ｂブロック 5 ミリ以下 3 － 5% ＋Ｃブロック 10 ミリ以下・粒子 7 － 10% ＋Ｄブロック 10 ミリ以下わずか、焼土？ 10 ミリ以下わずか、しまりややあり

63Ｂ．63A 層よりロームブロック多い、61 層に近いが全体に 61 よりやや暗い、7.5YR3/3 粘質シルト＋Ｃブロック 25 ミリ以下 10 － 15% ＋Ｂブロック 25 ミリ以下 5 － 10%、しまりややあり

64．7.5YR3/3 粘質シルト 30% ＋ 7.5YR3/4 シルト 50%（上記混合）＋ロームブロック 20%（Ｃブロック 15 ミリ以下 15% ＋Ｂブロック 10 ミリ以下 5%）、しまりややあり、粘性あり

65．5YR3/3 ＋ 7.5YR3/4 混合粘質シルト・しまりやや甘い＋ 5YR4/4 － 4/6 ロームＢ / Ｃブロック（しまりあり）15%

66．ロームＣブロック廃棄堆積層＋ 7.5YR3/4 － 4/3 シルト 5% のみ、しまりあり～ややあり

67Ａ．5YR4/4 － 4/6 ロームブロック廃棄堆積層＋ 7.5YR3/3 － 4/3 粘質シルト 15 ミリ以下 2 － 3% のみ、しまりややあり

67Ｂ．7.5YR3/3 － 4/3 粘質シルト主体＋ロームＣブロック 20 － 25% ＋ロームＢブロック 20 － 25%、しまりやや甘い

68．7.5YR2/3 － 3/3 粘質シルト＋ロームＣブロック（大小あり）30% ＋ロームＢブロック 20 ミリ以下 5%、土層上部にロームＣ大ブロック多い、しまりややあり～やや甘い、粘性ややあり

69．5YR4/6 － 4/4 ロームＢ土＋ 7.5YR4/4 － 4/3 シルト 10%、しまりややあり

70．ローム地山崩落再堆積層、5YR（4/4 －）4/6 ロームＢ土＋暗褐色Ｇ粒子 20 ミリ以下 2%、下部の地山より濁って暗い、しまりやや甘い、粘性あり

71．63B 層が落ち込む（根？）、7.5YR3/3 － 4/3 粘質シルト＋ロームブロック

72．ロームＣブロック、北外側（SK004- ｂ）との間に亀裂が入る

（80 層以下．SK004-b 下層）

80．ロームＣブロック＋Ｅブロックわずか＋褐色粘質シルト少

81．褐色粘質シルト＋ロームＣブロック 40% 以上

82．褐色～暗褐色粘質シルト＋ロームＣブロック 25% 前後

83．ロームＢ（/ Ｃ）ブロック＋暗褐色～褐色シルト 30% 前後

84．褐色粘質シルト＋ロームＢ / Ｃブロック 30% 前後（※ SX004- ｂの土層は、土層検討し線引きした後に図面を描く予定だったが、作業工程上のミスにより図化・注記ができなかった。上記は写真による推定を含む。全体に赤褐色系気味が強いロームブロックを主体にローム土で一気に埋めたような土層である。）

※以下、各層中のブロック土
（Ａ～Ｅは地山ローム土起源）

Ａ．5YR4/3（－ 4/4）暗褐色～にぶい赤褐色粘質シルトブロック

Ｂ．5YR（4/4・5/4 －）6/4（にぶい赤褐～）明赤褐色粘質シルトブロック

Ｃ．5YR5/4 － 5/6（一部 6/6）にぶい（明）赤褐～明赤褐色粘質シルトブロック

Ｄ（Ｄ 1）．7.5YR6/8 － 7/8 橙色～橙色粘質シルトブロック

Ｄ 2．黄橙色～ 10YR6/8 明赤褐色粘質シルトブロック

Ｅ．灰白色～浅黄色・浅黄橙色粘土（芯はカリカリするような黒色）ブロック、火山性粘土が貫入

Ｆ．黒色～黒褐色シルト土ブロック（有機質土）、炭粒・炭化物を含む場合あり

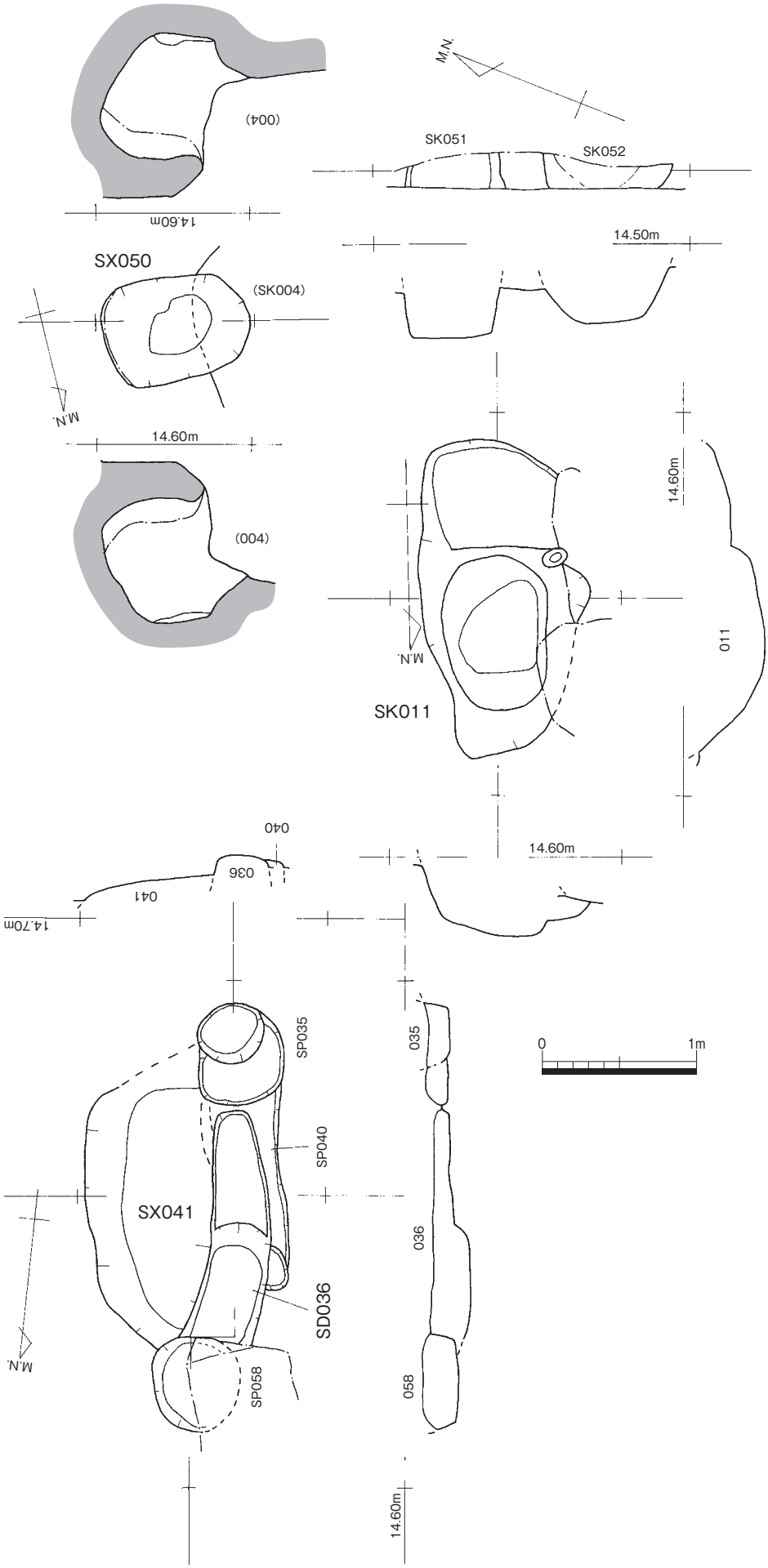
Ｇ．極暗褐色シルトブロック（有機質土）、炭粒・炭化物を含む場合あり

両者が同時存在した可能性がある。出土遺物は本調査遺構の中で最も多く、図化できた遺物も多い（第 26 図、第 27 図１～４）。中世の遺物以外に奈良時代を主とする古代の遺物が多いが、遺構の時期を示すものは中世の土師器坏・皿類や青磁があり、13 世紀後半から 14 世紀頃に掘削された遺構か。ただし中上層は 15 ～ 16 世紀頃の遺物もあり、埋没に時間がかかった可能性もある。なお SK004 の南

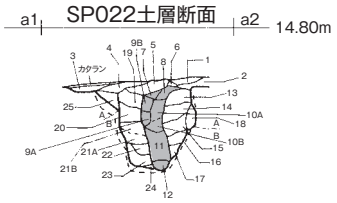
東隅角付近の壁から、斜め下に大きくオーバーハングする遺構が取り付いていたが、覆土の色や質が004とは全く異なり、別遺構（SX050）と判断した。

・SX050（第22図左上、PL. 4-2～5）

SX004南東隅角壁で検出。覆土は黒褐色粘質シルトであり SK004の覆土とは全く異なる。横穴状に掘り込まれる土坑で、横穴入口部の径は上下斜面が60 cm前後、横穴部の最奥部は入口斜面から水平に東へ75 cm前後、これより上へ22 cmで天井部、これより下へ60 cmで床面となる。天井部を外した時の平面形は東辺が広い不整砲弾形状で、東西94 cm×南北60～68 cmである。横穴入口部上端は斜め上方に立ち上がり、この横穴状土坑の西側上部には別の土坑が取り付いていたとみられる。さてこのような遺構の類例としては、弥生時代後期の「足元掘込土壙墓」がある。覆土の特徴も古代よりもさらに古い、近辺の遺構覆土では古墳時代以前、弥生時代に多いものであり、形状と覆土からその可能性は低くない。しかし、慎重に精査して掘削し、また覆土の大部分をふるいにかけても土器片も玉類1点も出土しなかった状況では、時期が不明であり、墓と断定することには慎重になる。そのため「足元掘込土壙墓状土坑」と呼称しておく。もし近隣で確実な



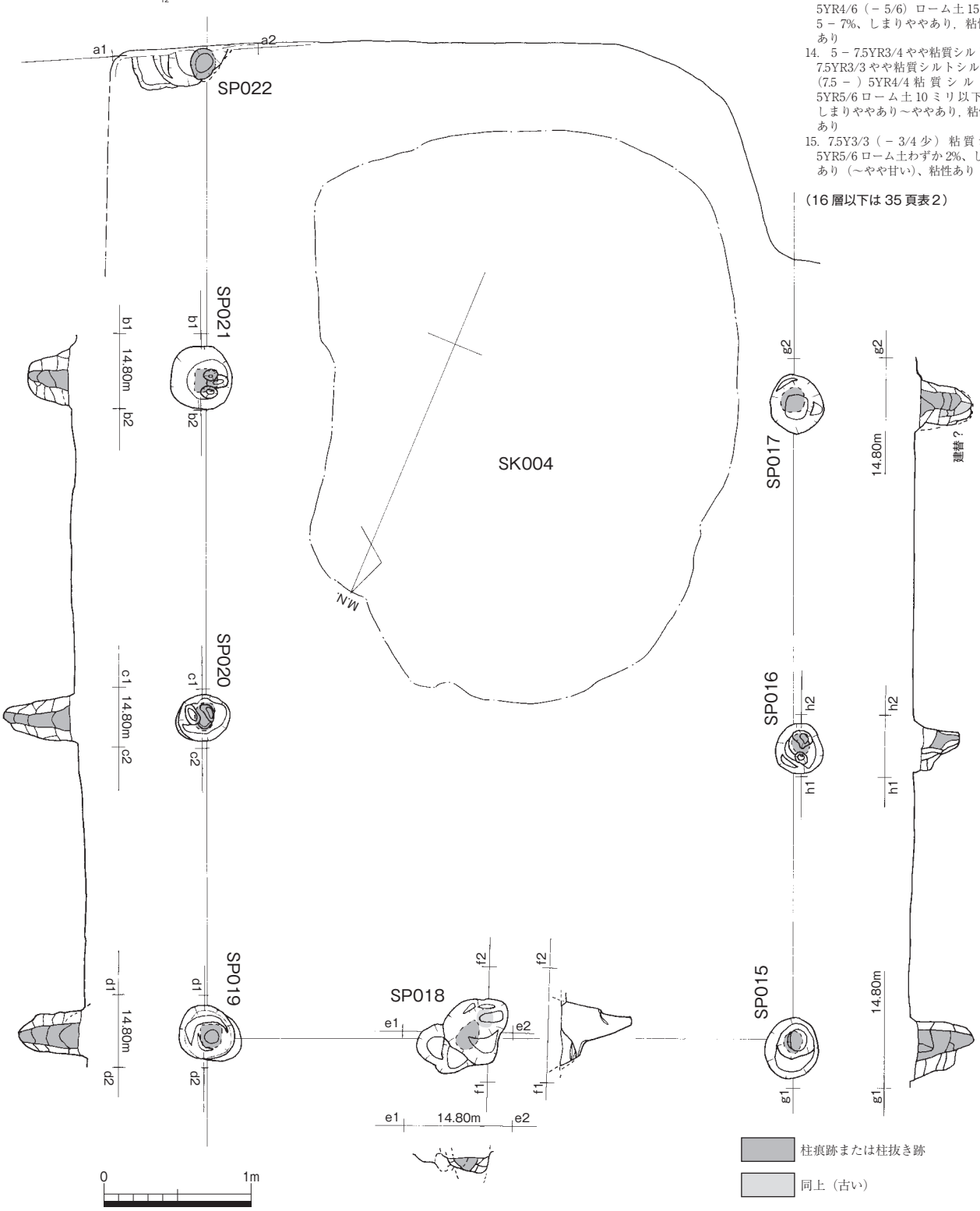
第22図　その他の土坑・溝状遺構実測図（S = 1/40）



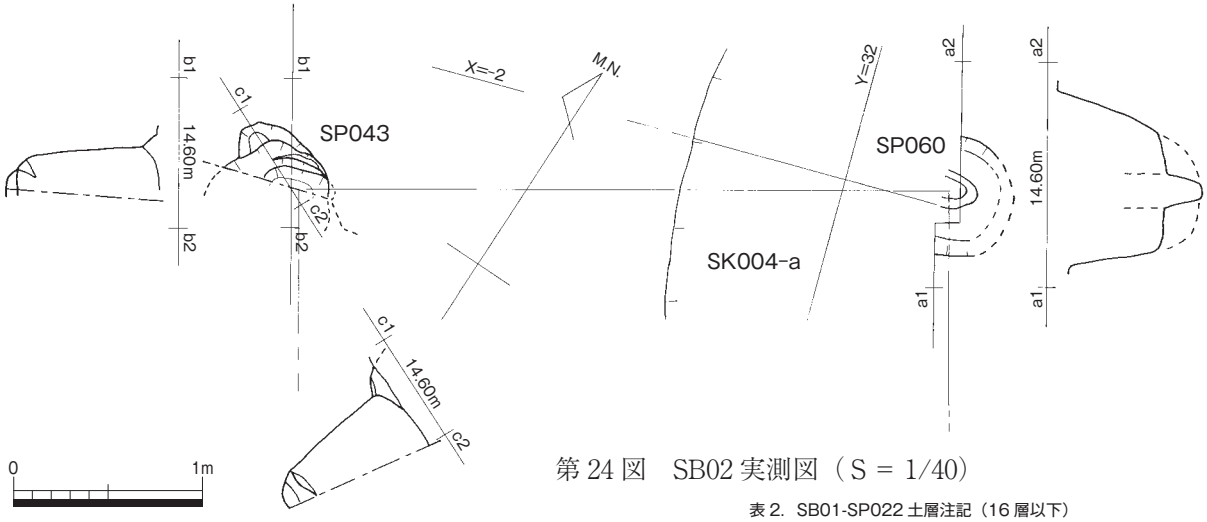
（SB01-SP022 土層注記）

1 A．1b 層にカクランのバラス・砂礫混入
1 B．3 層と同じ
2．3 層に似る、3 層に白色砂礫がさらに斑状に混入 3 － 5% しまりややあり～しまりあり
3．7.5Y3/4（－ 4/4）（やや粘）シルトしまりややあり + 5YR4/6（－ 7.5YR4/6）20 ミリ以下 20% + 上部層にカクラン（バラス・砂礫混入）、白色砂礫微粒 1 － 2%
4．7.5Y3/3 － 3/4 粘質シルト、ローム土粒子含む、しまりありかたい
5．7.5YR/3/4 やや粘質（・やや砂質）シルト + 5YRY4/6 ローム土 10 ミリ以下 10%
6．7.5YR 粘質シルト + 5YR4/6 － 5/6 ローム土 50% － 60%、炭粒 3 ミリ以下 5% 含む
7．7.5YR4/6 粘質シルト（汚れたローム土）+ 7.5YR4/4 粘質シルト 40%、しまりありかたい
8．7.5YR3/4 やや粘質シルト + 5YR（－ 7.5YR）5/6（－ 4/6）ローム土 40%、しまりありかたい、やや粘性あり
9．7.5YR3/3（－ 3/4）やや粘質シルト + 5YR4/6 － 5/6 ローム土 2.5 ミリ以下 15%、しまりありかたい
9 A．7.5YR3/3（－ 3/4）+ 5YR5/6 ローム土 10 ミリ以下 10%
9 B．7.5YR(3/3 －)3/4 + ローム土 4/6(－ 5/6) 3 ミリ以下 20%
10．7.5YR3/3 － 3/4 粘質シルト（10B 層）～上部（10B 層） 7.5YR3/4 粘質シルトに漸移 + ローム土 5YR5/6、5 ミリ以下 2 － 3%、やや粘性あり、しまりあり
11．7.5YR2/3 粘質シルト + 7.5YR3/4 － 4/4 粘質シルト 20% + 5YR5/6 ローム土 10 ミリ以下 5% 以下、しまりあり、粘性あり
12．7.5 － 5YR3/4 － 4/4 粘質シルト混合 + 5 － 7.5YR7/6 ローム土粘土 20 ミリ以下 7（－ 10）%、しまりややあり、粘性あり
13．(5 －)7.5YR3/4 粘質シルト + 7.5YR4/4 やや粘質シルト 13 ミリ以下 20% + 5YR4/6（－ 5/6）ローム土 15 ミリ以下 5 － 7%、しまりややあり，粘性（やや）あり
14．5 － 7.5YR3/4 やや粘質シルト +(5 －) 7.5YR3/3 やや粘質シルトシルト 10% +(7.5 －) 5YR4/4 粘質シルト 10% + 5YR5/6 ローム土 10 ミリ以下 5 － 7%、しまりややあり～ややあり，粘性（やや）あり
15．7.5Y3/3（－ 3/4 少）粘質シルト + 5YR5/6 ローム土わずか 2%、しまりややあり（～やや甘い）、粘性あり

（16 層以下は 35 頁表２）



第 23 図　SB01 実測図・柱穴土層断面図（S = 1/40）



第 24 図　SB02 実測図（S = 1/40）

表 2. SB01-SP022 土層注記（16 層以下）

16. 赤みの強い土層、5YR4/4（－ 3/4）粘質シルト＋ 5YR4/6 ローム土 2.5 ミリ以下 30% ＋ 7.5YR3/4 粘質シルト 20%、しまりやや甘い、粘性あり
17. 7.5YR3/3 粘質シルト＋ 5YR － 7.5YR3/4 粘質シルト 25% ＋ 5YR ローム土 10 ミリ以下 7.5%、しまりやや甘い～ややあり、粘性あり
18. 7.5YR3/4 粘質シルト＋ 5YR5/6 ローム土 15 ミリ以下 15%、しまりややあり（～やや甘い）、粘性ややあり
19. 7.5YR3/4 ン粘質シルト＋ 7.5YR4/4 粘質シルト 20 ミリ以下 2.5% ＋ 7.5YR3/3 粘質シルト 5%（漸移的に混入する）＋ 5YR5/6（－ 6/6）ローム土 10 ミリ以下 5%、しまりありかたい、ややシルト質、粘性少し
20. 7.5YR3/4 やや粘質シルト＋ 7.5YR3/3 粘質シルト 2.5% ＋ 5YR5/6 ローム土 10 ミリ以下 5%、しまりあり、粘性ややあり
21. 7.5YR3/3 粘質シルト＋ 7.5YR 粘質シルト 20% ＋ 5YR ローム土 20 ミリ以下混入は上部 21B 層 5%・下部 21a 層 15%、しまりあり、粘性あり
22. 7.5YR3/4 やや粘質シルト＋ 5YR5/6 ローム土 7 ミリ以下 3 － 5%（ローム土混入少）、しまりややあり～やや甘い
23. 7.5Y3/4 粘質シルト＋ 7.5YR3/3 粘質シルト 20% ＋ 5YR4/6 － 5/6 ローム土 15 ミリ以下 7 － 10%、しまりやや甘い、粘性あり
24. 7.5YR3/4 粘質シルト＋ 5YR4/6（－ 5/6）ローム土 40%、地山崩落土に上部 23 層混入、しまり甘い、粘性ややあり
25. 5YR4/4・3/4 － 7.5YR3/4（－ 4/4）粘質シルト（漸移的に土色が変化）＋ 5YR5/6 ローム土 10 ミリ以下 10 － 15%、焼土？ 3 ミリ以下 1 － 2%、炭粒 1%、しまりあり

地山 A．5YR4/6 － 5/6 やや粘質ローム土、ややサラサラ～ザラザラな感じのシルト質（鳥栖ローム）

地山 B．5YR5/6 － 6/6 やや粘質＋ 5YR4/6 粘質 20% ＋ 5YR（－ 7.5YR）7/6 粘土ブロックが混合するローム土、ややザラザラ感（鳥栖ローム下部）

同遺構が検出された場合に、本遺構もその可能性が高まると思われる。

・SX041（第 22 図下、PL.　3－5）

調査区中央西で検出した不整楕円形状の土坑。SD036 などに切られる。覆土は褐色土だが中世の色合いではなく古いものか。南北 210 cm ×東西 110 cm 前後、検出面からの深さ 16 cm。長軸はN－6°－E なのでほぼ真北。底面は平坦ではなく浅鉢状。出土遺物に乏しく時期不明。

・SD036、SP058・035（第 22 図下、PL.　3－5）

調査区中央西で検出。直線的というよりは若干弧状の溝。SD036 は SD040 を切るが、同一溝の掘り直しかもれない。1.55 m長以上、幅 30 ～ 45 cm、深さは北側の深い部分が 30 cm、南側の浅い部分は 16 cm。南北両側を切る SP058 と SP035 は、あるいは一連の遺構でたとえば門柱などか。058 は径 60 cm、深さ 22 cm、035 は 67 cm × 56 cm の不整円形で南側に径 40 cm の柱抜き跡がある。058 と 035 の間は、芯々（035 は柱抜き跡中心）で約 2.35 m。この柱筋の方位はほぼ磁北方向。出土遺物に乏しく時期不明だが、これらの南側には SK011 があり切り合いがあるが、方位がほぼ同じであり一連の遺構または時期が接したものかもしれない。

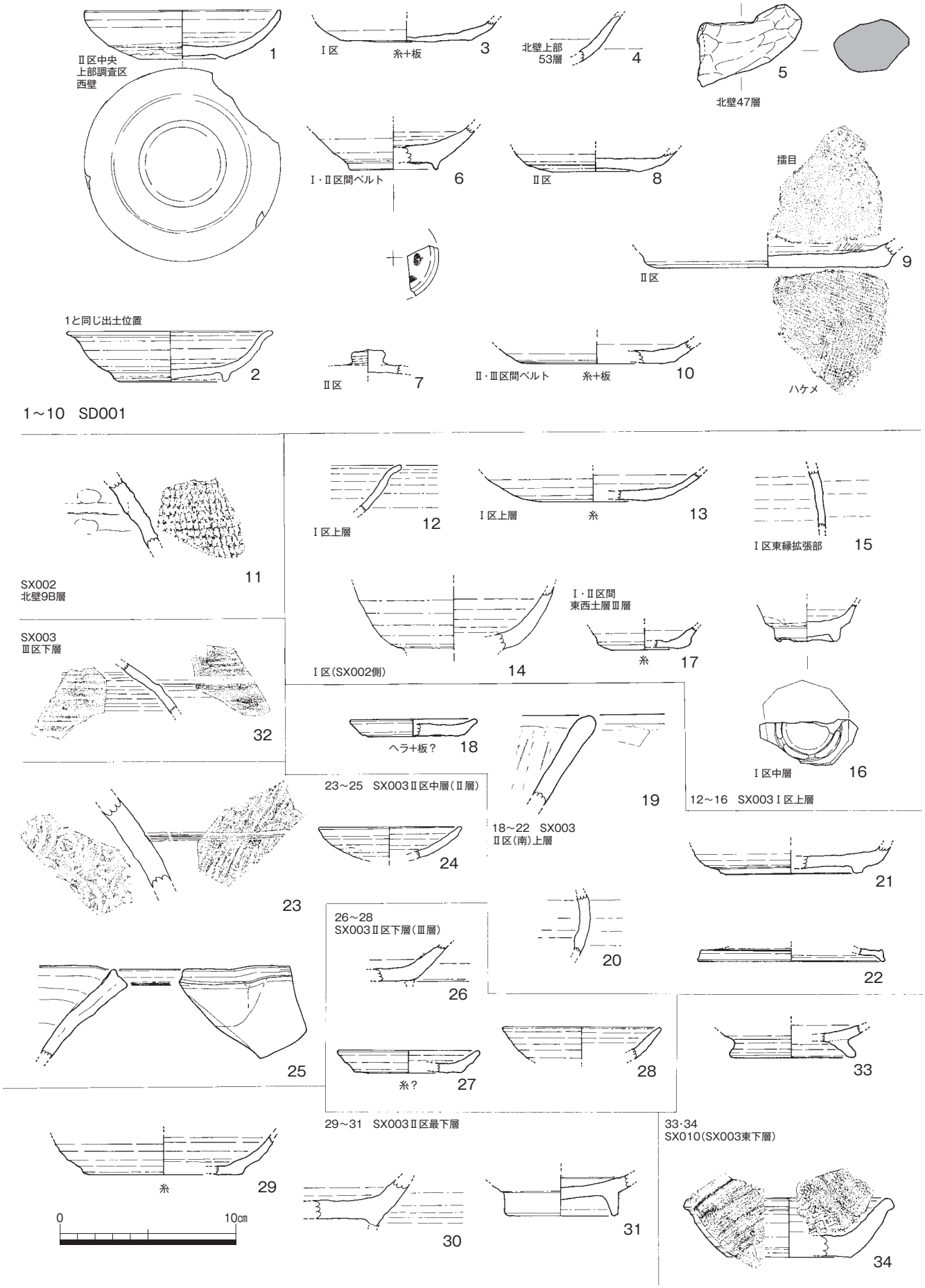
・SK011（第 22 図右中、PL.　4－7）

調査区中央南西で検出。西側を SD001 に切られる。長方形気味の土坑で、南側は浅くテラス状となる。南北 210 cm ×東西 110 cm、中央から北側の深くなる部分は南北約 140 cm。深さは 42 cm、テラス部分は 23 cm。方位は長軸N－1°－W で SP058-035 の筋とほぼ同じ。出土遺物が若干あり（第 27 図５～８）、土師器坏皿の型式から中世後期（15 ～ 16 世紀）の遺構であろう。

・SK051（第 22 図右上、PL.　4－6）

調査区西縁辺で SK052 とともに検出。東側を SD001 に切られ、西側は調査区外。覆土は、上層が 7.5YR 4／4 のシルト主体、下層は 5 YR 5／6 のロームブロック主体。径 86 cm 前後、深さ 35 cm 前後。北側を調査区壁土層で上端を確認したので、数値上は次の 052 より深さがあるようになるが、実際は底面レベルは 052 より高い。土坑としておくが柱穴の可能性もある。

・SK052（第 22 図右上、PL.　4－6）



第 25 図　SD001・SX002・SX003 出土遺物実測図（S = 1/3）

SK051 の北側で検出。東側を SD001 に切られ、西側は調査区外だが本来の遺構の中心はやや東側。径 64 cm、深さは 32 cm。上層は 7.5YR 3／4－4／3、中層は 7.5YR 4－4 のシルト、下層はロームブロック多くなる。土坑としておくが柱穴の可能性もある。051 と 052 は出土遺物に乏しく時期不明だが、土色から中世前半ないし古代の可能性がある。

・SB01（第 23 図、PL. 2－3、PL. 4－8～16）

調査区中央から南側にかけて検出した掘立柱建物。2 間×3 間、柱痕間で 4.0 m×6.7 m。方位は N-22.5°-W。南東隅の SP022 が大きく深いので隅柱だろう。ほぼ全ての柱穴で柱痕跡ないし柱抜き跡を検出した。柱痕は上部で径 14～20 cm だが、下部はすぼまって行く。梁間の途中の SP018 は梁間の中間から少しずれるが、浅い柱穴と深い柱穴が切り合い、補助的な束柱だろう。位置的に SK004 が建物の中央（やや南）に入り、伴う可能性がある（**裏表紙写真**）。各柱穴から若干の遺物が出土しており（第 27 図）、中世でも 13～14 世紀の建物であろう。

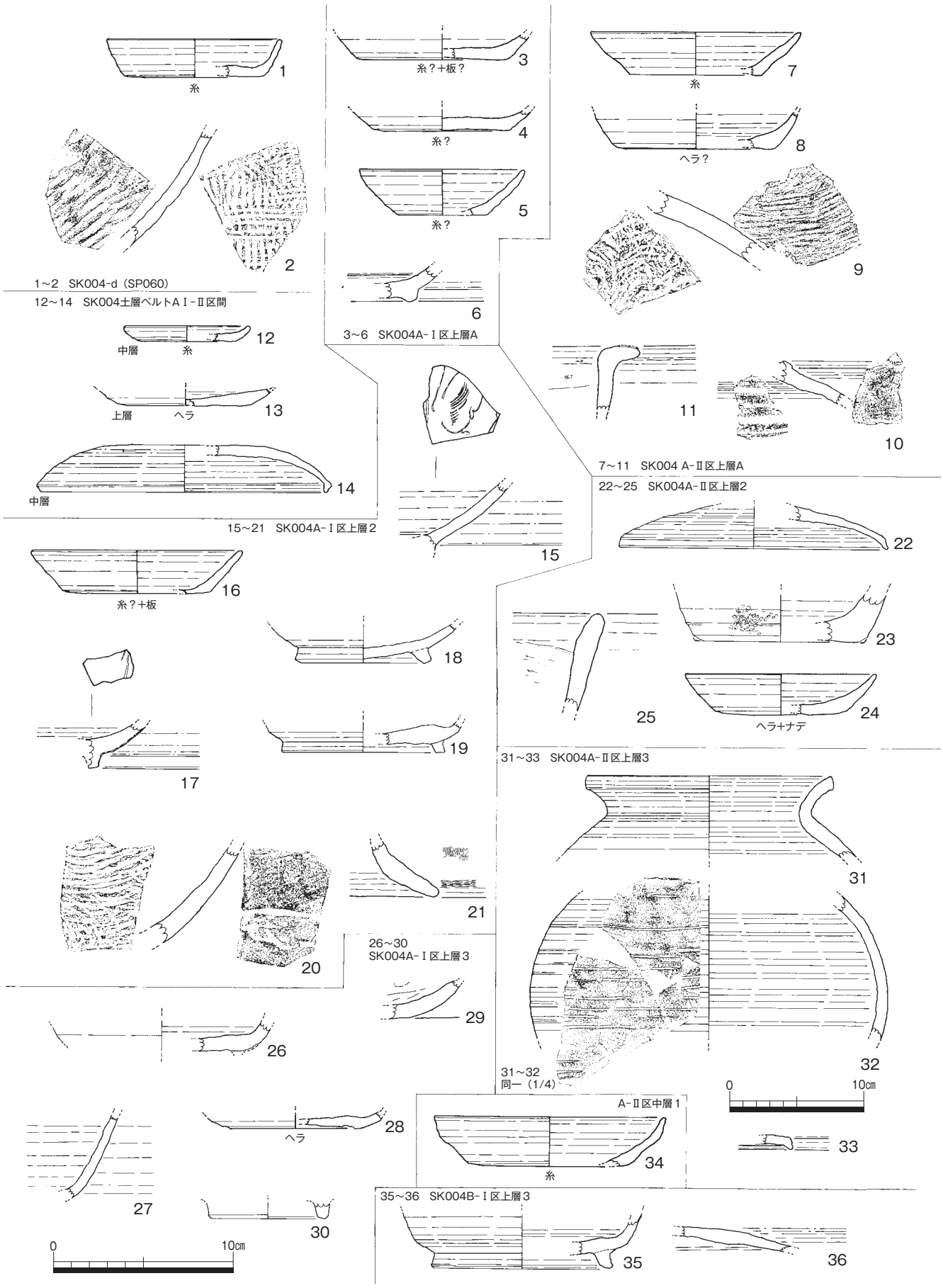
・SB02（第 24 図）

調査区南～南西で検出。2 柱穴だけだが柱間が広いのでおそらく調査区外南側に展開すると思われる。当初「SX004-d」とした SX004 中央の遺構を大きな柱穴（SP060）と判断したが、後に調査区南西隅で掘削した SP043 が同様に大きく深くなる柱穴となったので、両者が組み合わさるものと判断した。柱間は約 3.5 m、方位は N-57-E。SK004 を切るのでこれより新しいが、SK011 やさらに新しい SD001 とも異なる方位であり、14 世紀以降の中世後期のどこかとしか時期を絞り込めないが、出土遺物のうち SP060 出土の土師器坏（第 26 図 1）が伴うならば、楠瀬慶太による編年のⅥb 期にあたり（楠瀬 2009）16 世紀後半か。

2）出土遺物（第 25～27 図）

出土遺構の層位や位置などの詳細は図面中に記した。以下、各遺物について簡潔に記す。

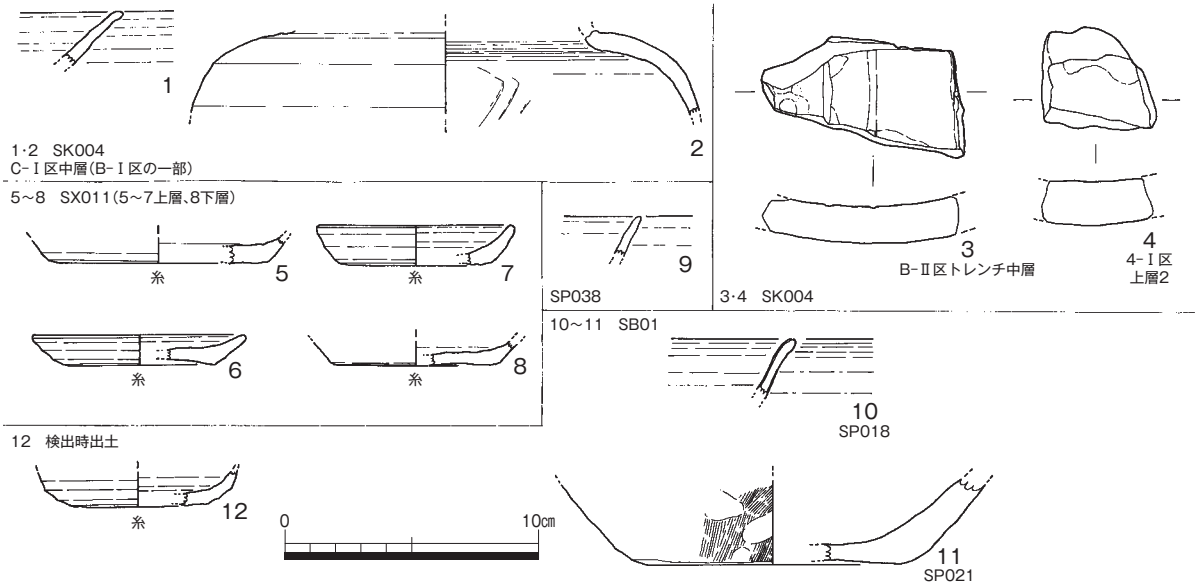
（第 25 図） 1～10 は SD001 出土。1 は明代の青花皿。外底は体部下部から露胎。2 は明代の白磁皿。高台は削り出し、畳付は高台下部から露胎。3 は土師器の坏。4 は土師器の埦。5 は土師器の甑ないし把手付鍋（甕）の把手。飛鳥～平安時代初期のものだろう。6 は越州窯系青磁の碗。オリーブ灰色（緑灰色）透明釉。高台は削り出し、畳付は露胎。奈良～平安時代前期か。7 は須恵器の坏ないし壺などのつまみ付蓋。奈良時代。8 は同安窯系青磁の皿。外底は露胎。9 は土師器の摺鉢。内底外縁から摺目、外底はハケメ。中世後半以降。10 は土師器の坏。11 は SX002 出土。須恵器の甕ないし壺。外面は格子目タタキ。12～31 は SX003 出土。12 は白磁碗。13 は土師器の坏。14 は龍泉窯系青磁碗。15 はオリーブ緑灰色釉の褐釉陶器。大宰府分類の陶器壺Ｂ群。16 は体部を多角形（八角形か）に作り出す白磁の小碗。高台削り出し、外底は体部下部から露胎。17 は土師器の皿。楠瀬編年（楠瀬 2009）のⅥa 期のヴァリエーションで 16 世紀前半か。18 は土師器の皿。楠瀬編年Ⅴb 期。19 は土師器の甑。内面はタテのヘラケズリ。奈良時代か。20 は中国製褐釉陶器の壺。オリーブ緑灰色釉。21 は須恵器の高台付坏。22 は須恵器の高坏脚裾部。21・22 は奈良時代。23 は須恵器甕の胴部破片。外面は斜位の平行タタキ後に先が割れたような工具による回転沈線を施す。24 は白磁の皿。外面は中位以下露胎。25 は中世土師器の捏鉢。楠瀬編年（日用雑器類）Ⅲ期か（楠瀬 2009）。26 は須恵器の高台付坏。高台が剥離している。奈良時代。27 は土師器の皿。口径 8.1 cm で形状も考慮し、楠瀬編年Ⅳa 期（14 世紀前半）だろう。28 は口禿げの白磁皿Ⅸ類。13 世紀後半～14 世紀前半。29 は土師器の坏。口径は 13.0 cm 前後だろう。楠瀬編年ではⅣb 期（14 世紀後半）の型式に近いが、山本編年（山本信夫 1990）ではⅩⅨ期（13 世紀末～14 世紀前半）に近い資料がある。30 は須恵器の高台付壺。奈良時代。31 は龍泉窯系青磁碗。32 は新羅・高麗系無釉陶器。外面は横位の平行タタキをナデ消し、小突帯がある。内面は凹凸が顕著な凹線状の回転ナデ。33・34 は SX010（003 古）出土。33 は土師器の埦。平安時代中期（10～11 世紀）。34 は瀬戸焼のオロシ皿。



第26図　SK004出土遺物実測図（1）（S = 1/3、一部1/4）

内底に鋭利な工具により格子目に刻んだオロシ目がある。外面は灰白色の、内面はオリーブ灰黄色の半透明釉。体部外面下部から外底は露胎、外底はヘラ切り。古瀬戸前期様式Ⅱ期（13 世紀前葉）か（藤澤良祐 1995）。

（第 26 図）1・2 は SP060 出土。1 は土師器の坏。口径 9.8 cm で、楠瀬編年Ⅵb 期、16 世紀後半か。2 は須恵器甕の胴部下半破片。内面の当具痕は粗い平行タタキ状のもの。3 ～ 34 は SK004-a 出土。3 ～ 5 は土師器の坏。いずれも外底が摩滅しているが、回転糸切とみられる。3 には板目圧痕があるか。5 は口径 9.2 cm であまり見ない形態。近いものは楠瀬編年Ⅵb 期にある。6 は白磁碗Ⅳ類。7 は土師器の坏。口径 11.6 cm で、楠瀬編年Ⅴb 期（15 世紀中頃～後半）か。8 は土師器の坏。外底はヘラ切りとみられ、古代の坏だろう。9 は須恵器甕の胴肩部破片。外面は横位の平行タタキ。古代か。10 は新羅・高麗系無釉陶器。外面には小突帯があり、縦位平行タタキ後ナデ消し。内面は細かい格子目状の当具痕を凹凸の顕著な回転ナデで消す。内外表面青黒灰色、器壁は紫灰色。11 は中世土師器の鍋。12 は土師器の皿。楠瀬編年だとⅥa 期（15 世紀末～ 16 世紀前半）か。13 は土師器の坏。外底はヘラ切りで、12 世紀前半頃。14 は須恵器の坏蓋。奈良時代。15 は白磁碗。高台削り出し。16 は土師器の坏。楠瀬編年Ⅴb 期か。ただし板目圧痕らしき痕跡があるので古い可能性がある。その場合、山本信夫編年（山本信夫 1990）XIX 期（13 世紀末～ 14 世紀前半）の坏b の可能性もある。17 は龍泉窯系青磁碗。高台削り出し。18 は黒色土器椀。19 は須恵器の高台付坏。20 は須恵器甕の胴部下半破片。外面は斜めの木目直交平行タタキ後ナデ。21 は土師器で、高坏の脚裾部として図化したが、原稿執筆時に再検討したところ、天地逆で甕ないし鍋の口縁部と判明した。19 ～ 21 は奈良時代。22 は須恵器の坏蓋。胎土に黒色砂礫を含み、表面が暗褐色気味で当地ではあまり見ない雰囲気であり外来系の搬入品の可能性がある。23 は陶器（炻器質）ないし中世須恵器の壺。無釉で、外面はよく見ると斜位の格子目タタキをナデ消す。灰色の地色で外表面はやや橙色気味になる。中世の瓦質土器にも近い雰囲気で、陶器というよりは中世須恵器の一種か。24 は土師器の坏。外底はヘラ切り後ナデ、古代の坏か。25 は土師器の甑と思われる。内面は口縁部ヨコナデより下はヨコのヘラケズリ。飛鳥～奈良時代。26 は須恵器の高台付坏。27 は須恵器の坏類だが体部が長くなるものか。26・27 は奈良時代。28 は土師器の坏。外底はヘラ切りだが、その外縁は退化した痕跡的な高台に見える。平安時代初期か。29 は土師器の椀。外底にはヘラケズリがある。飛鳥



第 27 図　SK004（2）・SK011・SP（柱穴）他出土遺物（S = 1/3）

時代か。30 は龍泉窯系青磁碗の高台。31・32 は同一個体の須恵器ないし須恵器系陶器。内面は丁寧な回転ナデ、胴部外面も丁寧な回転ナデだが（この前に縦位の平行タタキ痕跡がある）、工具による回転ナデで、一部沈線状になったり（一周しない）、凹線状になる部分がある。あまり見慣れない調整で、古代にしても中世にしても外来系の搬入土器だろう。33 は須恵器の土師器の坏蓋。奈良時代。34 は土師器の坏。口径 12.8 cm、底径 8.4 cm で体部内湾。楠瀬編年だとⅣｂ～Ⅴａ期（14 世紀後半～ 15 世紀前半）か。35・36 は SK004-b 出土。いずれも飛鳥時代末期の須恵器。35 は高台付坏。36 は坏蓋。

（第 27 図）1～4 は SK004-b 出土。1 は土師器の坏。2 は土師器の湯釜。3・4 は平瓦だが土師質で古代の瓦か。5～8 は SK011 出土。5 は土師器の坏。6・7 は土師器の皿。8 は土師器の坏か皿か微妙な形態・法量。9～ 11 は SB01 の柱穴出土。9 は中国製天目茶碗の口縁部。黒釉で一部茶褐色。胎土は灰色。10 は龍泉窯系青磁碗。11 は中世土師器の鉢（捏鉢）。14 世紀前後の型式か（楠瀬 2009 の「Ⅲ期」）。12 は遺構検出時の出土。土師器だが坏か皿か微妙な形態だが法量的には皿か。

〈文献〉

楠瀬慶太 2007「日用雑器類から見た中世土師器の土器様相」『中近世土器の基礎研究』22　日本中世土器研究会
楠瀬慶太 2009「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相」『九州考古学』第 82 号
藤澤良祐 1995「９．中世陶器〔１〕古瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、真陽社
山本信夫 1990「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて―」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古稀記念論文集

３．調査のまとめ

多くの遺構は、確実な年代としては鎌倉時代から近世初期（戦国時代末期）までであったが、古代（飛鳥時代～平安時代前期）の遺物（土師器、須恵器など）が比較的多くあり、その時期の確実な遺構はなかったが、東に隣接する 23 次調査でみられたような古代の遺構は削平されたとみられる。越州窯系青磁碗もあり、23 次の井戸遺構とともに有力者の屋敷の存在も考えられる。

中世後半（戦国時代）の溝 SD001 は、周囲で確認される壕で囲郭された **120×160 mの方形館の内部を区画する溝**であろう。竪穴 SK004 のような中世の貯蔵穴状の竪穴は、周囲でも麦野Ａ１次・７次で確認されている 24 次調査では、位置関係と出土遺物から推定される時期の一致（13 世紀後半～ 14 世紀前半前後）から、**掘立柱建物 SB01 が貯蔵穴（穴倉）の上屋として同時存在**した時期があった可能性が高い。凹み状遺構 SX002 と SX003 のうち、土層の観察から前者については貯水のための遺構ないし滞水していた遺構の可能性が考えられたが、浅い方の後者については不明確であった。類例の検討を要するが、SX002 は**屋敷（館）内の池**ないし**溜井**などが考えられる。SX003 も、出土遺物からやや長い維持期間が推測され（先行する SX010 は 13 世紀代、SX003 は 14 世紀に掘り直し、16 世紀頃埋め戻し）、埋没時は人為的な埋め戻しが考えられるので、屋敷（館）内の**池**との推測は一つの候補になる。

また SX050 は、覆土と形状から弥生時代後期の「**足元掘込土壙墓**」の可能性を考えた。もし足元掘込土壙墓であれば、これは甕棺墓の掘り方から甕棺を省略したものから変化成立する土壙墓であるので、本遺構のような横穴状掘込部（足元掘込部）がかなり突出するものは、型式学的に古いものであり、後期初頭の可能性がある。しかしながら出土遺物などによる証拠は無いため断定はできない。今後の周囲の調査で同様の遺構ないし弥生時代後期の墳墓などが出ないかが注意される。なお 24 次調査から北西 250 mの麦野Ａ８次調査では、弥生時代中期後半～後期中葉の遺構と遺物を検出しており、麦野Ａ遺跡において当該期の遺構がさらに検出される可能性はある。

以上のように、麦野Ａ 24 次調査では、遺跡における古代から中世の遺跡の展開を確認することができ、また弥生時代遺構の展開を予想させる遺構が検出された。

麦野Ａ 24 次調査状況全景（南から）

1．調査区北半遺構掘削状況（南から）

2．SD001 掘削状況（北から）

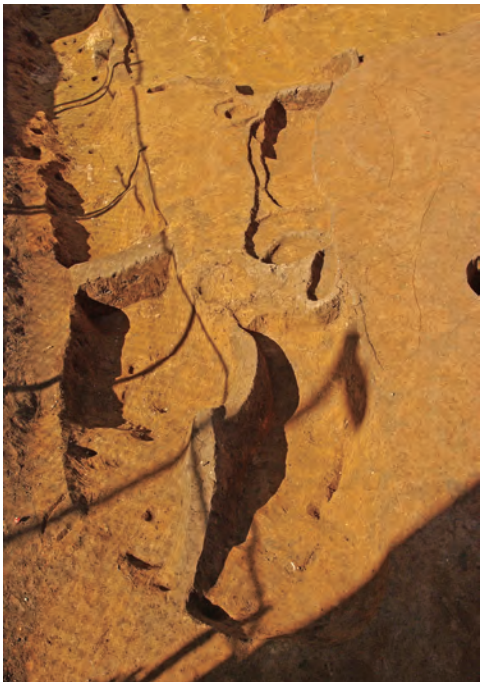
3．SK004 と SB01（南から）

1．SK004 上面検出状況（東から）

2．SK004 南北ベルト西側土層（西から）

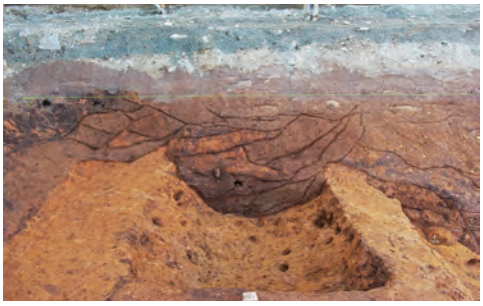
4．SK004 中央 SP060 確認状況（東から）

3．SK004 南北ベルト東側土層（東から）



5．SD001-Ⅱ区南半・Ⅲ区、SK011・SD036・SX041 掘削状況（南から）

7．SX002 完掘・北側調査区壁面土層（南から）



6．SD001-Ⅰ区北側調査区壁面土層（南から）

8．SX003 掘削状況・横断ベルト土層（北から）

1．SX003完掘状況（西から）

6．SK052･051掘削状況（東から）

2．SX050掘削途中状況（北西から）

7．SK011完掘状況（北から）

8．SB01-SP021土層･柱痕掘削（東から）

9．SB01-SP022土層（北から）

3．SX050上部半戴状況（北から）

5．SX050完掘南壁状況（北北西から）

10．SB01-SP018土層･柱抜き痕掘削（南から）･完掘状況（東から）

11．SB01-SP015土層･柱痕掘削（西から）12．SB01-SP016土層（西から）

4．SX050 完掘状況（北西から）

14．SB01-SP017土層･柱痕掘削（西から）13．SP016柱痕掘削（西から）

15．SB01-SP019土層･柱痕掘削（東から）16．SB01-SP020土層（東から）

ふりがな	むぎのえーいせき９
書名	麦野Ａ遺跡９
副書名	― 麦野Ａ第 23 次・24 次調査報告 ―
巻次	９
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1323
編著者名	清金良太、久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神１丁目 8-1　電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦 2017 年３月 27 日

遺跡名ふりがな	むぎのえーいせきだい 23 じちょうさ		
遺跡名	麦野Ａ遺跡第 23 次調査		
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくむぎの３ちょうめ 11 ばん 25、33、60、62		
遺跡所在地	福岡市博多区麦野３丁目 11 番 25、33、60、62		
市町村コード	40132	遺跡番号	0048
北緯	33° 33′ 14″（世界測地系）	東経	東経 130・27′ 39″（世界測地系）
調査期間	平成 27（2015）年１月５日～３月６日		
調査面積（㎡）	347㎡		
調査原因	共同住宅建設		

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	飛鳥時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 戦国時代 安土桃山時代 江戸時代	掘立柱建物、 井戸、土坑、柱穴	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、木製品（井戸側曲物）、石鏃（総量６箱）	９世紀代と 13 世紀代の井戸が２基重複して検出され、９世紀代の井戸は井戸側として木製品の曲物を使用していた。12 世紀代の竪穴状の土坑が２基重複して検出された。東西に延びる溝が検出された。断面は箱堀状であり、この溝は第６・９・18・20 次調査で検出された溝とつながり、方形館（城館）の区画溝となる。溝は戦国期の 16 世紀に掘削されたが、３回の掘り直しが推定され、埋没は出土遺物から近世前期に下ると見られる。

遺跡名ふりがな	むぎのえーいせきだい 24 じちょうさ		
遺跡名	麦野Ａ遺跡第 24 次調査		
所在地ふりがな	ふくおかしはかたくむぎの３ちょうめ 11 ばん 59		
遺跡所在地	福岡市博多区麦野３丁目 11 ばん 59		
市町村コード	40132	遺跡番号	0048
北緯	33° 33′ 18.6″（世界測地系）	東経	130° 26′ 26.2″（世界測地系）
調査期間	平成 27（2015）年２月 25 日～３月 27 日		
調査面積（㎡）	155.4㎡		
調査原因	個人専用住宅建設		

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落	奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代 戦国時代 安土桃山時代	溝、凹み状遺構(貯水遺構、池？)、貯蔵穴（穴倉）、土坑、掘立柱建物、柱穴	土師器、須恵器、高麗無釉陶器、 輸入陶磁器、 国産陶器、瓦	多くの遺構の確実な時期は中世の鎌倉時代から戦国時代までだが、古代（飛鳥時代～平安時代初期）の遺物が多くある。古代の確実な遺構はなかったが、東に隣接する 23 次調査や近隣の調査でみられる古代の遺構が削平されているのだろう。 中世後期（戦国時代）の溝は、周囲で確認される壕で囲郭された 120 × 160 mの方形館の内部を区画する溝であろう。出土遺物から近世初期に埋没する。中世の貯蔵穴状の竪穴土坑は、周囲でも麦野Ａ１次・７次で確認されている。この推定貯蔵穴（穴倉）には掘立柱建物が上屋として伴う可能性が高い。13 世紀後半～ 14 世紀と見られる。中世の遺構では貯水遺構や屋敷地内の池と推定される凹み状遺構が２基検出された。時期は 13 世紀後半以降である。 そのほか、弥生時代後期の足元堀込土壙墓に非常に類似した土坑が検出された。弥生時代との確証はないが、覆土の特徴は弥生時代でもよい。今後の周辺の調査の際に注意すべきであろう。

麦野Ａ遺跡９

―麦野Ａ遺跡第 23 次・24 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1323 集

2017 年３月 27 日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８-１

印　刷　株式会社 博巧印刷
福岡市南区那の川一丁目９番７号